
こっちみて

海来

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

こっちみて

【Nコード】

N9047C

【作者名】

海来

【あらすじ】

幼い頃に出会った初恋の少女に、今もなお恋をし続ける高校生「松田勇」の右へ左へと揺れ動く心を追っています。初恋の相手とはなかなか上手くかみ合わないし、自分自身の事もままならない、青春の真っ只中です。

こっちみて

プロローグ

俺は出会ったんだ。

真っ黒な瞳に真っ黒な長い睫毛、ふわっと揺れる黒髪の少女に。

出会ったその時に、取り込まれたのかもしれないその瞳に、

今もまだ取り込まれたまま俺の青春は動いている。

幼い頃のまま、何も変わらずにいられると思っていた。

でも、彼女と俺の関係は変わらないままのよう
で、

変わっているのかも知れない。

俺は、どうすればいいのかわからなくて……

今も、黒い瞳を覗き込むのを願いながら、避け

ている……

俺の初恋は、今も初恋のまま、終わるのかもしれない……

プロローグ（後書き）

これからのお話しは、この少年「松田 勇」視点で進んでいきます。
どうぞ宜しくおねがいます。

こっちみて

「1」 空手（前書き）

幼い頃、鈴ちゃんと出会って、何が勇の心に重く枷をかけたのかが分かると思います。

こっちみて

「1」 空手

「えっ？ 勇も空手するの……でも、前に聞いたときは嫌って言うたじゃない。どうしたの急に？……んゝわかった。鈴ちゃんが空手するって聞いたからだ。勇は鈴ちゃん大好きだもんねエゝでも、途中でやめるのは無しだからねっ。幼稚園でも約束は守ってもらうから、忘れちゃダメよ、いい？」

俺の母さんは、いつも一言多い。

今だって、鈴ちゃんのこと大好きとか言っただけなのに、俺の顔……真っ赤になってる。

ほら、鈴ちゃんママが俺見て笑ってる。

鈴ちゃんは……全然違うところ見てる、鈴ちゃんのお兄ちゃんと俺の兄ちゃんが空手してるところを見てるんだ。

鈴ちゃんの目をコッソリ見たら、黒い睫毛がバサバサしてるけど、真っ黒の瞳がキラキラしてとってもキレイなんだ。

俺の大好きな鈴ちゃんは、幼稚園に入ったから、空手するって言ったんだ。

だから、俺も空手する。

だって、俺と鈴ちゃんは幼稚園もこれから入る小学校も中学校も一緒じゃないんだ。

空手に来なけりゃ、鈴ちゃんには会えない。

そんな簡単なこと、5歳の俺にだってわかった。

鈴ちゃんは6歳だけだね。誕生日が俺のぼうがずーと後なんだ。背だつて、鈴ちゃんのぼうがチョット高い、母さん達は「お姉ちゃんも弟みたいで可愛いわ」なんて言ってる。

だけど、その意味をこの時の俺は何にも分かってなかったんだ。弟にしか見えないってことが、どんなに大きい事か、その時の俺が分かるわけ無いだろう。

鈴ちゃんが、ただただ大好きだったってだけなんだから、弟って

こっちみて

言うキーワードがトラウマになるなんて思いも寄らない。

それだけじゃない、空手を習い始めて1年が過ぎた頃、道場内の親善試合があった。

鈴ちゃんに「カッコいい」って言ってもらいたい一心で、俺は勝ち続けた。

小さい時からバカなのか、事もあるうに当の本人の鈴ちゃんにまで勝って1年生の部で優勝したんだ。

優勝カップを手にして、鈴ちゃんの所に行ったら、鈴ちゃんは号泣の真っ最中だった。

俺の大好きな鈴ちゃんは、負けるのが大嫌いだった。

俺のほうを振り向きもしないで、ママにしがみ付いて泣いている鈴ちゃんの姿を見て、その時まで誇らしかった優勝カップは、いらなくなつたゴミみたいに重たくなつた。

鈴ちゃんの涙は、嫌だ。

鈴ちゃんが泣くのは、嫌だ。

鈴ちゃんが泣くぐらいなら、俺はこれからずっと勝たなくなつた方がいい。

そう思った。

その時から何年経つても俺は、勝ちたくても勝てなくなつた……

もう二度と、ゴミみたいに重たい優勝カップは要らないと、心の奥で思っている……。

「1」 空手（後書き）

次話から、高校生になった勇と鈴ちゃんが出てきます。

こっちみて

「2」 2対1の割合（前書き）

高校生になった勇は、なぜかブルー。
楽しいはずの高校生活は、決定的に足りないものがある。

こっちみて

「2」 2対1の割合

今年の春から俺は念願の高校……いやっ……念願じゃなかった高校で青春の日々を送っている。

勿論、新しい友達も出来たし、成績だつてそんなには悪くないから、それなりに楽しく生活してるってとこなんだろうけど。

俺には、幼稚園の頃から大きな野望があつたんだ、それなのにっああく俺って此処つて時に失敗すんだよな。

俺と鈴ちゃんは、中学までは学区の関係で一緒には学校に行けないから、高校に賭けてたんだ。

ところがだ、鈴ちゃんれいの兄貴も、うちの兄貴も同じ進学校に通つてて、鈴ちゃんがやっぱり同じ高校だと聞いた時には、正直そうとうなショックで……て、俺はあんまし成績良くないから、レベルの高い進学校なんて絶対無理だつた。

だけど、それを知つた中2の春から、俺は燃えたんだ、勉強して勉強して、やっと兄貴達の通う高校が射程範囲に入った。

これで、いける！ 入試の日まで頑張りぬいた俺は、俺が見ても健気で可愛かつたと思う。

でも、どうやら俺は燃え尽きていたらしい、間違ひなく受かつておかしくないほどの出来だつたはずなのに、発表のボードに俺の入試番号は存在しなかつた。

一緒に合格発表を見に行つてた鈴ちゃんは
「残念だつたね……勇ちゃんゆう頑張つたのにね……弘ひろにいと一緒がよかつ……たんだよっねヒックツ」

そう言つて、自分は合格してるのに、大きな黒い瞳からボロボロと涙を零して泣いていた。

俺はといえば、そんな鈴ちゃんれいの言葉に、何も言えなくて、何も考えられなくて、その場に鈴ちゃんれいを置いて、走つて逃げた。

鈴ちゃんれいの涙は、嫌なのに……やっぱり、いつも俺が原因で泣か

せてしまう。

それから俺は、一ヶ月の間、空手道場に顔を出さなかったってか、鈴ちゃんがまた泣きそうで怖かった。

あれから半年、季節はもう秋になっている。

俺の心も、寒くなってきた。

と言うより、ずっと寒いままなんだけど。

何故って？ 毎日、俺は一人電車に取り残されるから……

鈴ちゃんの兄貴の圭斗けいとには、うちの兄貴より一つ上だから卒業してる、同じ高校の三年の兄貴と一年の鈴ちゃんは、仲良く一緒に登校していく。

毎朝、駅で待ち合わせて三人で電車に乗るんだ。

ほら、鈴ちゃんが入り口で手を振ってる。

真っ直ぐに伸びたサラサラのきれいな黒い髪が、風にフワッてゆれて、顔にかかる髪を掻き揚げる白い指は、ほっそりしてるのに柔らかいお菓子みたいに見える。

最近の俺には、鈴ちゃんが無性に食べたくなくなるときがある甘いお菓子みたいで、ちよつとヤバイって思うときがある。

勿論、真っ黒な睫毛に縁取られてる黒くて大きな瞳は、朝日にキラキラ輝いて、とても綺麗だ。

この駅から、5つめの駅で兄貴と鈴ちゃんは降りていく。

鈴ちゃんは、キラキラの黒い瞳で微笑んで、兄貴と話しながら俺を置いて行ってしまふんだ。

俺はその後一人で、3つの駅を乗り越す、そりゃあ入学して半年も経てば、同じ電車に友達ぐらい何人か乗ってる。

でも俺は、この電車が嫌いだ。

混んでるのに、一人ぼつちな気がするから……それに、入学当時はよく聞かれたさ。

「おい松田ア、あの子誰よ。あつそつか、お前の兄貴の彼女だア。かつわいいナア」

その度に俺は、胸の奥を何かにギュツと掴まれたような痛みを感じた。

だから、否定するでも、肯定するでもなく、ただ聞き流してた、そうすることしか、痛みに耐えられそうになかった。

だって、そうだろ……毎日毎日、一人置いてかれて、鈴ちゃんが兄貴を見つめて瞳を輝かせてるのを見るだけでも辛いのに、これ以上どうしろって？

そろそろ、限界かもしれない……小さな時にはなかった、俺の奥のほうに確かに存在する激しい感情……どうする事も出来ない時が来るかもしれない。

その時、また、俺は鈴ちゃんを泣かしてしまうかもしれないんだ

……

「2」 2対1の割合（後書き）

勇の中の激しい感情、鈴ちゃんを泣かすことが、一番怖いはずなのに……

こっちみて

「3」 道場で…（前書き）

今回は、勇と鈴ちゃんの会話に二人の関係がみえかくれしています。

こっちみて

「3」 道場で…

俺の通ってる高校は、空手部があるのはあるんだけど、弱いつてか、ほとんど活動してない。

顧問の先生なんて、学生時代は中高ともに卓球部だったらしい。だから、俺は毎日結構早めに道場にやって来る。

まア暇だからなんだけど。

基礎トレーニングを終えて、たっぷりかいた汗を乾かそうと、俺は道場の窓から顔を出した。

秋のちよつと冷たい風が、ブワツと髪の毛を舞い上がらせた。

俺の髪は長すぎて程じゃないけど、風になびくほどはある。

茶色なのは、生まれつきだ。

その時、あまり見たくない光景が目に入った。

俺はそのまま、ぐるりと回って、窓枠に首をかけて空を向いた。

「ブワツ！ ガホツなっ何すんだよ。くそっ」

俺の顔にバサツと大きな音をさせて、タオルがぶつけられた。

誰がやったかなんて分かっているさ、もちろん鈴ちゃんだ。

「勇ちゃん、もう秋なんだからね。汗かいた後に冷やしちゃダメだよ。子供なんだから」

そんな事分かっているさ。

でも、さつき兄貴と一緒に道場に入ってきた鈴ちゃんを見て、そのまま見続けるのが嫌だったんだ。

「子供じゃネーよ。お前と同じ高校一年生だ」

「その言い方が子供なんじゃない。そんなんだから彼女できないんだよ」

俺は、チラツと鈴ちゃんを見た。

「誰が、彼女いないって言った？」

今度は、鈴ちゃんが俺をチラツと見たと思う。

「いないんじゃないの？ いるの？」

「イワネー」

「勇ちゃん！」

俺は、答えを言わないまま、その場を離れてサンドバッグの方に歩いていった。

鈴ちゃんは、ずるい。俺が彼女できないのは、欲しくないからだ。って、一人しかいないからだ。って、知ってるみたいだ。

知ってて自信たぷりに、彼女できないなんて言ってるんじゃないかって……思ってしまう。

俺はバカか？ 鈴ちゃんが知ってるはずない。知られちゃ困る。

だって、きつと鈴ちゃんは、兄貴を好きで、兄貴も鈴ちゃんのことが好きだから。

「テヤツー！」「ターツー！」「オリヤー！」

俺は、何度も何度もサンドバッグを蹴りつけた。

何か訳のわからない感情に飲み込まれそうで、必死に蹴りつづけた。

そんな俺の肩に、ぐっと手を掛けたのは、兄貴の弘弥だった。

「そんな無茶な蹴りをするな。足を傷めたらどうするんだ。試合もちかいんだぞ。少しは自覚しろ」

「うつせーよ」

俺は、小さく呟いた。

「勇……もう少し、真剣にやってみないか。お前なら、もっと上が狙えるはずだろう。いい加減、目を覚ませ。それと、鈴に何を言っただか知らんが、あいつの事もかき回すな。あいつには今回の試合は、重要な試合なんだぞ。分かったな」

兄貴はそれだけ言うと、俺の傍から離れていった。
バスッ

俺は、無言でもう一度サンドバッグを思いっきり蹴った。

こっちみて

「3」道場で…（後書き）

勇は、自分の感情がコントロールしにくくなってきているようです。
ところで、毎日1話づつ更新していきたいと思っていますので、
気長にお付き合いくだされば嬉しいです。

こっちみて

こっちみて

「4」 5センチ（前書き）

弘弥から、思わぬ話が……

「4」 5センチ

鈴ちゃんに変な意地を張って、「彼女いるかも……」みたいな事を言ってから、俺は鈴ちゃんに話しかけられずにいたし、鈴ちゃんもいつもの様に気安く声を掛けてくれる事は無かった。

ただ、時々だけとチラリと鈴ちゃんを見ると、かならず彼女と目が合った。

何故か、嘘を言った事を責められているようで、俺は居心地がわるいんだ。

今日もまだ、鈴ちゃんも兄貴も道場に到着していない。

兄貴と鈴ちゃんは、高校の空手部に所属していて、これが俺の高校とは違って、進学校でありながら文武両道をモットーとした校風で、空手部もかなり強い、全国レベルだ。

だから、二人とも毎日部活が終わって、道場に出てくるから、俺なんかよりはかなり遅くなる。

って言ってる間に、今日は土曜日だから午前中に部活を終えた兄貴と鈴ちゃんが来た。

その姿に、やっぱり今日の俺も胸の奥がギュって痛くなる。

でも、鈴ちゃんが兄貴を好きなら、俺は諦めるしかないんだ。

だって、俺の兄貴は、俺から見てもイイ男で、成績優秀、空手はハイレベル、何処に行っても女の子にモテまくってる。

俺の憧れ、物心ついた頃から、ずっと兄貴を目標にしてきた、でもその反面、俺のコンプレックスの源かもしれないんだけど、それでも兄貴は俺の大事な兄貴だから……

モテモテの兄貴が彼女を作らないのは、鈴ちゃんがいたからだろうし、鈴ちゃんだって、兄貴の方が、こんな俺よりイイに決まってるよな。

こっちみて

「今日も、やっぱり鈴ちゃんと話が出来なかった。

チラツと鈴ちゃんを盗み見た。

クソツ兄貴が隣にいる。

「おい、勇。こっち来い」

「なんの用だよ、俺は兄貴達二人の邪魔はしたくないんだよ、今は特に……そう思いながらも、しみついた行動と言うのは恐ろしいもので、俺は兄貴の横に立っていた。

「何？」

「ちょっと、機嫌悪そうにカッコつけた。

「ああ、今夜な師範に呼ばれて、他の先生方とのミーティングに出るように言われた。遅くなるらしくて、師範のお宅にそのまま泊めて頂くことになったんだ」

「って、それがどうしたんだよ。母さんに言っとけばいいのか」

「兄貴はチラツと鈴ちゃんを見た。

「いや、毎週土曜日はオジサンが鈴を迎えに来てるだろう。今週は出張で無理なんだそうだ。オバサンは車の運転できないしな。お前家まで送っていけ。いいな。しっかり送り届けるよ」

「俺は、目を見開いた。

「何で？ 俺っ俺が……」

「鈴ちゃんが俺を見つめている。

「嫌ならいいよ。一人で帰るから」

「そう言った鈴ちゃんは、何故か泣き出しそうで、俺は慌てた。

「嫌じゃない！ ただ、えっと……そんな事初めてだから、おっ驚

「ただけって言うか」

俺の言葉に、鈴ちゃんの大きな黒い瞳がキラキラと輝いて、にっこり笑ってくれた。

それだけで、俺はこの数日間の苦しい日々を忘れた。

やっぱり、鈴ちゃんは可愛い、大好きだ。

「じゃっ着替えてくる。勇ちゃんも早くしてね」

鈴ちゃんは、俺の心の中の余韻を打ち消すように、パツと身を翻すとアツと言う間に女子更衣室に姿を消した。

俺は、ただボーっと更衣室のドアを眺めていた。

「勇、送り狼になるなよ」

兄貴がいきなり俺の背中を叩いて、変なことを言った。

「何だよ！ 送り狼って！」

「お前そんな言葉も知らないのか。やっぱりバカだなア」

俺は、知らず知らずに拳を握った。

「そう言う意味じゃないっ！ 変なこというなって意味だろーが」俺の握った拳を見て、兄貴は笑っている。

「勇、そんなに真剣に怒るな。冗談だって、バカだなア」

「バカって言うな！ 殴るぞ」

兄貴はそれでもまだ笑っていて、手をヒラヒラ振りながら

「まかせたぞー」

と言って道場を出て行った。

きつと、道場の横にある師範のの家に行ったんだ。

兄貴は、師範の奥さんにも好かれてるから、きつと風呂でも勧められてたりすんだ。

さあ、兄貴はいなくなった、鈴ちゃんは残った、俺は………勿論、鈴ちゃんを送っていくさ。

そう思った瞬間、何を想像したかは言いたくないが、俺の身体がカッと熱くなった。

こっちみて

「おまたせつ勇ちゃん！ 何やってるの。早く着替えてきてよ。帰れないでしょ、もう」

俺は、何分ぐらいそうしていたのか、鈴ちゃんに声を掛けられるまで、意識が飛んでいたようだ。

俺にいったい何が起きてるんだ？

鈴ちゃんの顔を見ただけで、俺の体中が赤くなったと思う。

「勇ちゃん！」

もう一度よばれて、俺はやっと男子更衣室に向かった。

俺が更衣室に入ると、数人が着替えをしているところだった。

「勇、鈴ちゃんを送っていくんだってな。お前が送ってもらおうほうがいいのか？」

茶化したような事を言ったのは、現役大学生の友人さんだ。

俺は、友人ともひとさんが先輩だからって黙ってはいない、勿論、礼儀は忘れないようにしないとイケないんだけど。

「友さん、どう言う意味ですか？ 俺が鈴ちゃんより背が低いから

とか言ったら、許しませんよ」

俺は拳を突きつけるカツコをした。

「あつ、ばれたか。ごめんごめん謝るから、殴らないでエ〜」
ふざけながら、友人ともひつさんは更衣室から出て行った。

他の数人も、着替え終わった様で、次々に出て行った。

俺と鈴ちゃんは、出会った幼稚園の時から、身長之差が縮まらない。
い。

現在、鈴ちゃん168cm、俺163cm。

5cmの差は、童顔の俺にはかなり厳しい。

一緒にいたって、お姉ちゃんと弟に見られることも、昔からよくあつた事だ。

長身の兄貴に長身スレンダーな鈴ちゃんは、お似合いなんだ。

いつまでたつても、俺は鈴ちゃんの弟……だけど、いつか本当の
つてか義理だけど、弟になったりしたら、耐えられネーカも……俺
つてバカだわ。

何か、自分で自分を追い詰めてねーか？

「さつさと着替えなくちゃ、また怒られる」

俺は、溜め息をつきながら着替え始めた。

こっちみて

「4」 5センチ（後書き）

次話は、二人っきりの帰り道です。
何か起こるのかなア

こっちみて

「5」 帰り道（前書き）

二人つきり、勇の心はドキドキで、何をどうしたら良いかなんて、
分からないんです。

こっちみて

「5」 帰り道

午後7時、この季節になると曇った日なんかは、もう真っ暗だ。今夜も、その真っ暗って、俺の心は真っ暗でもない。

けど、こんな事初めてなんだ、暗くはないけど、どうして良いかも分からない。

こんな事なら、「兄貴もっと早く言ってくれ」どうするか考えておくからさ。

いつもは、鈴ちゃんのパパが迎えに来てくれて、ほとんどの場合、俺と兄貴も乗せて帰ってもらうし、何度か鈴ちゃんの家まで送っていったこともある。

もちろん、その時は兄貴も一緒だし、この春までは圭斗にいがいたから送っていくことはなかったけど。

鈴ちゃんの家は道場の一番近くの駅から4つ目、俺んちは道場からは歩けば結構遠いけど駅には近い。

駅は俺の住んでる町内にあるんだけど、道場は、隣の町内ってことだ。

そんな位置関係からして、鈴ちゃんはお迎えが来るのがほとんどで、とにかく、俺が一人で鈴ちゃんを送っていくなんて有り得ない事なんだ。

実は、鈴ちゃんは毎朝一度改札を出て、兄貴と俺を待ってるんだ……いや、同じ高校だし兄貴を待ってるんだろ……

俺の心臓は、そんなはじめての出来事に、かなり動揺しているみたいだ。

鈴ちゃんはいつも俺の前を兄貴と一緒に並んで歩く。

そしていつも俺は、その鈴ちゃんの後姿を見ながら歩くんだ。

やっぱり今夜もそうらしい、道場を出てから鈴ちゃんは、俺の前を歩き続けている。

電車に乗ってからは、空いてる席に二人で並んで座ったけど、何
って話をする事もなかった。

鈴ちゃんは、さっきからメールに夢中だ……友達かな？

男友達だったら……すげーショック……

電車を下りて、改札を出てからも、鈴ちゃんは俺の前をいつもと
変わらず歩いている。

え？ 俺が前に行って並べば良いって……そんな事できるはずな
いだろう、こんなにドキドキしてる心臓の音が、鈴ちゃんに聞こ
えちゃうじゃないか。

俺は、このままでいい。

いつも後ろを歩いてるんだ。

兄貴のいない隙に、横に並んじゃダメだ。

きつと、心臓が破裂する……それは罪悪感からなのか、この不思
議な高揚感からなのかはわからない。

鈴ちゃんの後姿を見ているだけなのに、今夜はドキドキが止まら
なくて、身体が熱いような、浮いたような感じがしてくるのはなん
でだ？

その時、鈴ちゃんがいきなり振り向いた。

「勇ちゃん。ハンバーガー食べて帰ろうよ。ね？」

鈴ちゃんっやめてくれ！ 俺の心臓が爆発する……ねって、何だ
よ。

その、ね？ って首を傾げただけで、俺の身体は全部、心臓にな
った。

耳までドクンドクン言ってる。

「ハンバーガーって、そんなん食べてたら帰んの遅くなるだろ。オ
バサン心配するって」

俺は、自分の声が上ずっていないか不安になりながらそう言った。
兄貴が一緒の時は、「そうだね」って言ってたから、俺も兄貴み
たいに言ってみた。

そしたら鈴ちゃんは、いたずらっ子のような微笑を浮かべた、んん

可愛すぎる！

って俺のバカ……

「大丈夫だもん。今、お母さんにメールしたもん。勇ちゃんと一緒ならいいって！」

俺の体中のドキドキも気付かないのか、鈴ちゃんは俺の腕を掴んで走り出した。

目指すは、× バーガーだ。

人の気も知らないで、俺の大好きな鈴ちゃんは、その細い体のごこに入るんだって位、ハンバーガーを頬張って、フライドポテトとサラダも食べた。

今は、俺のポテトを食ってる。

俺なんか、ハンバーガー半分しか食べなかった、もちろん残りは鈴ちゃんが食べたんだけど、自分のを食べた後にね。

「よく食うよな。怪獣かお前は」

などと、思ってもいない憎まれ口を叩いてみる。

「勇ちゃんと違って、しっかり練習してますからね。お腹もへるのよ」

「ああ、そうですかア〜だ」

俺の憎まれ口にも、鈴ちゃんはニッコリ笑っている、今夜は機嫌がいいらしい。

ドスッ！！

俺の横に、身体をぶつけるように誰かが座ってきた。

「伊原さんだア！ 珍しいくなア〜い？ こんな時間に優等生の伊

原さんでもこんなとこにいるんだア〜ってかア〜このカレシイ、可愛くナ〜イ？」

いきなり俺の横に座った女は、超ケバケバに化粧して、派手な力ツコの女だった。

そいつは、俺の腕に自分の腕を絡めてきて、上目遣いに見つめてくる。

ちよつと、気持ち悪いんですけど。

鈴ちゃんが、もろ嫌そうな顔になってる。

見た目だけでも、鈴ちゃんとはとても合いそうにはないけど、このしゃべり方じゃ仲良く無いのは明らかだ。

「このカレシイ、伊原さんのじゃないよね。だって、伊原さんには松田先輩ってメチャクチャイケテルカレシイがいるもんね。この彼、あたしにイ紹介してよオ」

ピキツて俺の中の何かが弾けた。

(伊原さんには松田先輩って……カレシイがいる……)

このケバケバ女の言葉が、俺の中で何回も何回も響いて、ぐるぐる回る。

俺は、分かっていたと思ってた。

鈴ちゃんと兄貴の事……分かってるって思ってたんだ、今まで……諦められるって……

俺は、自分でも分からないままに身体を動かしていたらしい。

自分でどうしようもない感情をセーブできなくて、ケバケバ女の腕を振り切つて、飛び越えて、ハンバーガー屋から走って逃げ出した。

今回も、やっぱり逃げ出した。

逃げて逃げて……走って走って……鈴ちゃんを置き去りにした。

真っ暗な夜に……置き去りにした。

思いつき走り続けて、もうだめだつてぐらい走って、何人かにぶつかったみたいだけど、謝る事も振り返る事も出来なかった。

俺は、イッパイだった。

どうしようもないくらい、心がイッパイイッパイで。

ドサツと地面に崩れ落ちて、道路の真ん中なのに寝転がった。

曇りだと思っていたのに、いつの間に晴れたのか、星がきれいに光って、月も出ていた。

あんまり走ったせいで、息が上がって呼吸がしにくい、はアはアと大きく息を吐いたり吸ったりしながらいると、自分の目から、何かが零れたのを感じた。

寝転がってるから、そのまま耳の方に流れていった。

涙……、俺は泣くのは嫌いだ、泣いたのなんか何年ぶり？……

どの位、そうしていたのか、呼吸も大分落ち着いた。

大通りから大分離れたせいだろうか、その間に誰も通りかからなかったと思う、多分……

ちよつと横を見ると、公園の横の道なのだと分かった。

分かったからといって、まさか遊ぶわけじゃないから関係ないんだけど……

なぜか、公園を見てると、また涙が流れた。

俺の心は、壊れたかもしれない……もう、前のようには戻れない、前のようには三人でいられない。

もう無理かもしれない、俺の初恋……

「5」 帰り道（後書き）

鈴ちゃんを置いてきてしまった勇。

何やってんの！ 怒らんといてくださいな。

みなさん読んで下さってありがとうございます。

これからもどうぞ可愛がってやって下さい。

こっちみて

「6」 もう無理……（前書き）

道路に転がったままの勇は、横にある公園に見覚えがあった。

こっちみて

「6」 もう無理……

道に寝転んで、公園を見ていて思い出したことがある。

この公園で、鈴ちゃんと遊んだことがあるんだ。

兄貴達と一緒に遊ぶんだって言って、鈴ちゃんの家によく行つた頃、野球やサッカーがしたかった兄貴達とは別行動で、母さんと鈴ちゃんと鈴ちゃんのママと一緒に来たんだ。

俺は、足の速い鈴ちゃんを追いかけて、何度も転んだような気がする。

あんま、はつきりしないけど多分この公園だ。

あんな亀の形をした滑り台、この辺ではここだけのはずだし……

「……ゆ……や……」

あの頃から、大好きだった鈴ちゃん、今も大好きな鈴ちゃん。

俺は、あの頃には戻れない。

「……ゆ……ち……ん……」

弟みたいに可愛い勇ちゃんじゃいられないんだ……

「……ゆう……ん……」

なんか、もう頭おかしい、鈴ちゃんが俺を呼ぶ声が、幻聴が聞こえるみたいだ。

これ以上おかしくなりたくなくて、俺はギョツと目を閉じた。

自分の視界から、鈴ちゃんとの思い出の公園を消したかった。

「勇ちゃ……ハアハア勇ちゃん……ハア」

幻聴はより一層激しくなる。

ポタツポタツ……

雨？ 今まで晴れてたじゃネーカ、俺は慌てて目を開けた。

目の前は真っ暗で、何も見えないのに、周りに良い匂いが立ち込めていた。

相変わらず、ポタポタと雨が落ちてくる。

サツと風が吹いた。

こっちみて

こっちみて

視界を遮っていたものが、サラサラと揺れた。

「勇ちゃんのバカ！ 怖かったんだからねっ」

鈴ちゃんの声がハッキリと聞こえて、その後に俺の肩に鈴ちゃんの重みを感じた。

鈴ちゃんは、しばらくそのまま泣いていた、俺のもう片方の肩をドンドンと叩きながら。

これは幻聴でも、幻覚でもない本物の鈴ちゃんだ。

俺は、鈴ちゃんをまた泣かせてしまった事を後悔しながら、別の感情に頭が身体がおかしくなってきたき始めた。

さつき、道場から出て歩いてきた時よりも、激しく打つ鼓動、もう全身が波打ってるみたいで、カツカツと燃えるみたいに熱い。

俺は、思わず鈴ちゃんの頭を抱きかかえていた。

「鈴ちゃん！ 鈴ちゃん、ゴメン。ゴメン。俺っ……………」

鈴ちゃんが、フツと大きく息を吐き出した。

「勇ちゃん……………どうして置いていったの、怖かったんだよ。でも、追いかけてきちゃって、追いかけて言わなくちゃって思って……………」

「な……………にを……………」

ああ、これで終わりだ、鈴ちゃんは兄貴と付き合ってたって告白しに来たんだ。

聞きたくない。

そんな事は、聞きたくないんだ！

俺は叫びそうになった。

「弘にいとほ付き合ってるじゃないよ。勇ちゃんに内緒なんてしないから。勇ちゃんの弘にいとほ取ったりしないよ、私」

え……………？ 何ですと？ 今なんて言った？

俺は、ガバツと起き上がって鈴ちゃんの肩を掴んだ。

「そっなの？」

鈴ちゃんが、コクンと頷いた。

でも、何で勇ちゃんの弘にいとほ取ったりしないって言ったんだらう？？？？

鈴ちゃんは分かりにくい。

まっいいか二人が付き合っていないなら、俺の初恋はまだ続けられる。

そう思った瞬間、俺の心臓はまたドキドキとし始めた。

掴んでる鈴ちゃんの肩から、彼女の体温が伝わってきて、俺の体温をもっと上げていく。

また、風が吹いてきた。

さっき鈴ちゃんからした匂いがする、シャンプーの匂いなのか、
コロンか何かの匂いなのか、甘くて心地よい匂いだ。

もう限界だ。

俺は、すっと立ち上がるとスポーツバッグを拾い上げ歩き出した。
「勇ちゃん待つて！」

鈴ちゃんも立ち上がって追いかけてくる。

俺は、振り向かないで鈴ちゃんに話しかけた、だって、顔を見たら決心が鈍るから。

このままだと俺は、鈴ちゃんに何かとんでもなくヤバイ事をしそ
うだ。

「鈴ちゃん。俺さ、もう鈴ちゃんと兄貴の後ろは歩かないから。前
だけ見るから、二人の前歩いて、前だけ見るから」

鈴ちゃんの足音が止まった。

「ッ勇ちゃん？ どうしたの？ 今までずっと仲良しだったのに…
…」

鈴ちゃんが、また泣いてないかと不安になる。

でも、今振り向いたら、今までみたいな弟に戻ってしまう気がする。
た。

弟に戻ったまま、いつか鈴ちゃんを酷く傷つけてしまいそうで怖
かった。

「もう無理……鈴ちゃんの後ろを歩くのは、もう無理なんだ」

「もう無理？ 何で、なんで……そう……そうなの勇ちゃん」

鈴ちゃんの声が震えている。

なぜ鈴ちゃんが、鈴ちゃんの声が震えてる？

俺が、不思議に思っただけで振り返ろうかと思案している時に鈴ちゃんが言った。

「そう……勇ちゃんが、そう決めたんなら良いよ。でもね、前を向いて歩くなら、私の言う事も聞いて……」

俺は戸惑った、鈴ちゃんの言いたい事って何？ そんなのあんのかよ。

「あのね、ずーと秘密にしてたけど、私ね好きな人いるの！」

俺は思わず振り返った。

多分、俺の顔は歪んでいたと思う、今にも泣き出しそうだったかもしれない。

鈴ちゃん、あんたって人は、今夜だけで俺を天国から地獄に落とすのかよ。

「でもね、勇ちゃんには言わない。教えない。勇ちゃんが前を歩いていくなら、しっかり前を向いてて、私の事なんか気にしないで。」

いっつ勇ちゃん、約束だよ。私の事は気にしちや駄目だからね」

鈴ちゃんっ、あんたはと言う性格ですか。
俺の決心を何だと思ってる、好きな人がいるなんて聞いて、俺の心が前を向いてられるか？

それでも、俺に前を向いてるって？

「ああっ、前だけ向いてるさ。お前の事なんか気にしちやいない」
俺は、また歩き始めた。

鈴ちゃんは、俺の少し後ろを着いてくる。

背中に、鈴ちゃんの視線を感じた。

鈴ちゃん、その射抜くような強い視線も、受け止めるよ……前を歩くなって決めたから。

忘れてはいけない事を忘れてた。

鈴ちゃんは、自分から仕掛けることは好きだけど、何かを仕掛けられることは大嫌いだっただ。

仕掛けた相手は、それが兄貴達であっても、こっぴどく返り討ち

に会っていた。

きつと、今日の俺の前向き宣言は、それ以外の何者でもなかったのだろう。

負けず嫌いの鈴ちゃん、それでも君が大好きです。

兄貴と付き合ってないって聞いて、嬉しくなった。

でも、好きな人がいるって聞いて、今どん底だ。

一体何処のどいつだよ、鈴ちゃんに惚れられた奴って。

気になって眠れないかもしれない……

俺の前向きは前途多難だ……

でも、兄貴に言われた「送り狼」にならなくて良かった。

俺は、これ以上鈴ちゃんに近付いたら、この不埒な感情を抑える

のは……

……もう無理……

こっちみて

「6」 もう無理……（後書き）

鈴ちゃんは、やっぱり気の強い負けず嫌い。

なんだかなーと思うのは私だけでしょっか？

読んでくださってる方々、ありがとございませう。

明日も頑張って登校したいと思っています。

よろしくです。

「7」 夢（前書き）

勇の母親のちよつと変わった面を描いてみました。
それと、勇の見た夢はちよつと悲しいけど、可愛いです。

こっちみて

「7」 夢

鈴ちゃんは、無事に送り届けた。

あれから、歩いてる時も何も話さなかった。

ただ、二人とも前だけを見つめていた。

鈴ちゃんの家の前で、

「ありがとう、さよなら」

って鈴ちゃんが言った時、返事が遅れてしまった。

もう会えない「さよなら」に聞こえたから……

「勇ちゃん？ 気をつけてね」

「え？ ああ、じゃーな」

そう言うのがやっとだった。

こっちみて

家に帰り着くと、母さんがリビングでビールを飲んでた。

「あつ勇おつかえりい〜。どうだった？ 鈴ちゃんとのデート。楽しかったんじゃない」

風呂上りのビールでもう出来上がってるのか、この母親は！

「何がデートだよ。送って行っただけじゃねーか。母さんは一言多いんだよ、いっつも」

母さんが、きよとんとした顔で俺を見てる。

「勇？ 何かあった……？ まあ、昔はよく泣く子だったけどね」

何だよ、俺が泣いてるとでも……あつしまった、涙の痕だ！ ヤバイ、また鈴ちゃんのママにチクラレル……

俺は、わずかに身体が振るえた。

泣いたなんて、死んでも知られたくない。

母さんは、TVのお笑い番組を見ながら大笑いしてる。

「勇、誰にも言わないから、そのかわり今回だけ限定ね」

「え？……」

嘘だろ、おしゃべり母さんが言わないなんて、有り得ない。

でも、母さんは嘘だけは付かないんだ。

「鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔しないでよ。これでも母親ですからね、息子の最大の危機ぐらいは分かるのよ。ゆっくりお風呂に入ってきなさい、ご飯用意しとくから」

俺は、コクリと頷くと、風呂に向かいかけて振り向いた。

「あつと、メシいらネーワ。食ったから」

その時、さつきまであんなに穏やかに、大きな心を見せていた母さんの顔色が変わった。

「母さんのご飯食わずに、何処で食べてきたア！作ってあるんだから、全部食べる！」

「はい！！」

俺は、風呂場に逃げ込んだ。

母さんは、昔から自分が作った食事には、かなり執着があつて、つてか、自分をないがしろにされるのを嫌う。だから、俺と兄貴に、母の手作りご飯を残すことを許さなかった。

勿論、父さんも例外ではない、父さんなんかそのせいで太りすぎて、今じゃ運動の為に自転車通勤してるくらいだ。

愛情こもった母のご飯……こめてくれ過ぎるのも、迷惑な話だ。

さア、風呂に入ろう……ゆっくりと、母さんの機嫌が落ち着く頃まで……

こっちみて

「…………… 勇は、鈴ちゃんが大好きなのよね。ねエ鈴ちゃん、将来は勇のお嫁さんになって、オバちゃんと一緒に住もうか」
「うん！ 鈴、勇ちゃん大好き、オバちゃんも大好き。勇ちゃんのお嫁さんする」

鈴ちゃんの笑顔が満開になって、ピョンピョン跳ねるとスカートがフワフワ揺れた。

鈴ちゃんは、俺のお嫁さんなんだ。結婚って何かわかんないけど、嬉しい。

「だから、勇ちゃんと鈴と、オバちゃんと弘お兄ちゃんと、鈴のお兄ちゃんとママ、皆一緒に結婚するの」

「まア、鈴ちゃん皆で一緒なの？ すごい結婚になるね、うふふふ」
「うん、すごい結婚なの」

今までの嬉しい気持ち、その時半分になった……………

「…………… 勇ちゃんは、可愛いから大好き。このクマさんにそっくりだし」

鈴ちゃんは、お気に入りのクマのぬいぐるみを抱きしめていた。

俺は、真っ赤になって俯いた。

鈴ちゃんが、俺を抱きしめてるって思った。

「あつ、弘お兄ちゃん！ 弘お兄ちゃんはカッコいいから大好き」

鈴ちゃんは、兄貴の腕の中にぬいぐるみごと飛び込んでいった。
俺は、とっても悲しくなった……………

いつの間に寝たのか、俺は布団も掛けずに寝ていたらしい。
朝日が、きちんと閉じていなかったカーテンの隙間から差し込む
のが眩しいのと、背中が寒いので目が覚めた。

「へっくっシユン……………ズビツグス……………風邪か？」

慌てて布団に潜り込んで、さっきの夢を思い出そうとした。
何か、すごく嬉しくて、すごく悲しい夢だった気がする。

思い出したいけど、思い出せない。

前に、TVで見た記憶があるんだけど、夢をコントロール出来る
様になると一日がプラスにプラスに回っていくって。

でも、夢をコントロールしようと思えば、夢を忘れてちゃいけない
って、覚えている事が第一歩なんだって。

これじゃ、何にも進まないや……………今の俺を象徴してるみたいだ。

俺は、完璧に風邪をひいたみたいで、熱が上がり動けなくなっていた。

朝、母さんがおかゆを作ってくれたけど、喉を通らない。

水分の補給だけはしっかりしなさいって言いながら、母さんはスपोर्टドリンクと朝の残りのおかゆをおいて、ダンスの練習に出掛けていった。

習い始めたばかりの社交ダンスの発表会が、一ヶ月後にあるらしい、だからって熱のある息子一人置いてくか？ フツー。

あつ、母さんはフツーとは違うんだつた。

息子にかまう部分が、よそのお母さん達とズレてる。

ほお擦りする程の可愛がりようかと思えば、鬼のように怒るしいまだに殴るから困っている、結膜炎になっただけで大騒ぎして病院をハシゴするのに、今日みたいに熱のある息子を置き去りにする。

何だか心細い。

「置き去り……俺も、昨日……鈴ちゃんを置き去りにした。バチが当たったみたいだ」

昨日、俺の肩に顔をうずめて泣いてた鈴ちゃんの重みが、いま鮮やかに蘇ってくる。

それだけで、俺の心臓はドクドクと大きく音を鳴らし、身体はより一層熱を上げている。

俺は、バカだ。

何回も、鈴ちゃんを泣かしてしまつた。

泣かしたくないのに……

何か、苦しくなってきた……

こっちみて

「7」 夢（後書き）

次話は、勇の兄、弘弥と勇の掛け合いが入ると思います。

こっちみて

「8」 兄貴とチーズケーキ（前書き）

兄の弘弥の意外な面が見えてきます。
ひとつで、意外性も魅力な場合もあるんですよ。

こっちみて

「8」 兄貴とチーズケーキ

俺は、風邪薬の効果なのかぐつすりと眠っていたみたいだ。

誰かがいる気配を感じて、ゆっくりと目を開ける。

「おつ勇！ 目が覚めたか。調子はどうだ？ 母さんに、勇が熱が出たって聞いて結構急いで戻ってきたんだけどな」

「そう……悪いナ兄貴……」

つて、時計を見たら午後三時だった。

急いで帰ってきたつて、空手の稽古が終わってからだろーが。

それに、兄貴……それは何なんだ。

「兄貴、なに食ってるの……」

兄貴は、丸い焼き型に入ったものに、スプーンを突っ込んだままでニツコリ笑った。

「あつこれな。鈴のこのオバサンが昨日送ってくれたお礼につて、焼いてくれたチーズケーキだ。やっぱり、オバサンのが一番うまいな。勇もそう思うだろう」

俺は、熱で辛い事もあつたけど、呆れて言葉が出なかった。

昨日、鈴ちゃんを送って行ったのは、この俺でしようが。

それが何で！ 兄貴が食ってたよ！

それも切り分けもしないでスプーンで食うか。

「それ以上、く・う・な」

「何だつて？ 勇？ 大丈夫か」

「それ以上食うなつて言ったんだよ。それに切つて食えよ。俺のだぞ……それ」

兄貴は、俺の剣幕に驚いて、目を見開いていた。

俺のほうにスプーンの刺さったままのケーキを差し出してきてから、スプーンに気付いたのか、慌ててスプーンを抜いて口に啜えた。

「ふあまん……」

兄貴は、肩を落としてガツクリしていた。

昔からそうなんだ、兄貴は食い物となると見境がなくなる。

それに、どう食べるかとか、シチュエーションなどどうでも良い、旨いかどうかだけが重要なんだ。

そんなだから、大体のことに關して大ざっぱで、片付けができないから、部屋の中はメチャクチャだ。

それを知らない女どもは、やれ清潔感があるとか言ってる。

兄貴の評価が落ちるから何も言わないけど、俺はけっこう被害にあうことが多いんだ、今みたいに。

「兄貴……もういいって。残りちよつとだけでいいから冷蔵庫に入れといてよ。元気になつたら食べるから」

「ふおうか、入えとく。ホンロこえんら」

兄貴は、大きな身体を出来るだけ小さくして部屋から出て行った。もちろん、口にはスプーン、手にはチーズケーキを持っていた。

「なあ、勇お前……昨日、鈴に何か言つたか？」

「え？ 何かつて？」

兄貴はどこまで知ってるんだ。

俺は、氷枕を取替えに戻ってきた兄貴が言った言葉に、心臓が飛び跳ねた。

兄貴はベットの横に立ったまま、俺の熱を測るように額に手を当てた。

「いや、鈴がちよつと変だつたつて言うか。変わった気がしたからな」

兄貴は、俺の額から離れた手を、何故かじつと見てから振っている。

いや、そうじゃなくて、鈴ちゃんが変わった？って話だ。そうじゃないだろ、俺が変わんなきゃいけないんだぞ。

「どういう事？ 変わったってさ」

「ん、鈴にとって今回の県大会はある意味、大きなターニングポイントになるんだ。これからの方向性を決める大事な試合だ。組み手と形を両立させていくのか、形一本に絞るのか。それは、これからの鈴の空手人生の中で、かなり大きな選択になるのは分かるよな」
鈴ちゃんが、形一本に絞る？ 何で？ 組み手でもかなりの実力のはずなのに……。

鈴ちゃんの実力を知ってる俺は、納得がいかないのと驚いたので叫んでいた。

「そんなの勿体無いんじゃないの」

俺は、ガバツと起き上がった。

「だから、鈴に何を言ったんだと聞いてるんだ」

兄貴の目が、ちょっと細くなって俺を見つめていた。

その目に、無性に腹が立った。

何で俺との話が、鈴ちゃんのターニングポイントなんかに関係あるんだよ。

「俺との事なんか、関係ないだろ。それに兄貴に昨日の事を話す気はない！」

俺は、息を弾ませながら怒鳴った。

はアはア言ってる俺の肩を優しく押さえて、兄貴は俺を布団に戻した。

でも、相変わらず目が細くなってる、何だか冷たい。

「そうか、お前は何も分かってないって事なんだな。それじゃあいい、鈴の空手の事に関しては、俺と師範で考えていく。お前は口開けて見てろ」

けっこう激しい言い方をして、兄貴はそのまま部屋を出て行った。俺には、何が何だか分からない。

今日の鈴ちゃんは、昨日の鈴ちゃんとどう変わったって言うんだ。

俺は、鈴ちゃんの後ろは歩かないって決めたんだ。
前だけ見てるって、そう言った。

鈴ちゃんの後ろを歩くのは、もう無理だって言った。
それが、何で鈴ちゃんが変わる原因になるんだよ。

兄貴のめちやくちな言草が、癪に障った。

「俺と鈴ちゃんのこと何にも知らないくせにつるっさいんだよ！」
俺は、氷枕をドアにぶつけた。

氷枕の止め具が壊れて、床に水と氷が飛び散った。

俺と鈴ちゃんのこと、知らないくせに？

本当に知らないのか？

兄貴はいつも一緒だった、その兄貴が言ってる事……やっぱり分
からない。

俺だけ、頭の出来が違うから分からないのかなア……

俺は、頭を抱えたまま、ベットの中で丸くなっていた。
ひどく頭が痛い。

このまま死にそうだ。

あんま頭良くないくせに、ズート受験勉強頑張ったり、今の高校
には入ってから鈴ちゃんに嫌われそうで勉強を続けたり、今回み
たいに頭ばつか使ってるから、壊れたかもしれない。

コンコンッ

ノックの音、また兄貴だったら嫌だ。

何にも聞きたくないのに。

「勇？ お元気ですかア？ おかゆサンが嫌いな勇のために、母さんが特製鳥雑炊を作ってきましたア。さアどうでしょう」

母さん、あんたですか。

「お帰り、でも無理食べたくなーから。頭イテー」

母さんは、慌てて机の上に雑炊を置いたようで、直ぐに俺の横に座った。

「勇、死なないでエ。大好きだから。もう置いていかないから」

母さんは、俺に覆いかぶさって布団の上から抱きしめてきた。

母さん、あんたは俺が言った事、聞いてたか？

俺は頭が痛いんだ、上に乗るんじゃない。

「母さん……重い、俺って病人ですけど」

「あつと、ごめんごめん。忘れてた、この手の病人には抱擁が良いかと思つてね」

何だよ、この手の病人って……この手のって??

母さんは、体温計で俺の熱を測って、着替えをさせてくれた。

「熱下がったじゃない。一気に熱が上がって下がったから、頭痛くなつたんじゃないの？ きつとそうよね」

つてあんた。

それは本当の事ですか？ お母さん？

母さんは、机の上に置いた雑炊をとると、二カツと笑った。

「病人のふりはダメだからね。美味しくいただきましょう。あんなのは、恋の病つてやつじゃないの？ ささつと食べようね」

母さん……あんたは鬼だ。

でも、恋の病つて当たつてるのかもしれない……

こっちみて

「8」 兄貴とチーズケーキ（後書き）

松田家の家族像、少し分かってくださいましたでしょうか。

結構、お母さんに振り回されていそうな、どこにでもある家庭です。更新が、毎日夜中になってしまいます。

頑張っているのですが、何分時間がなくて、続けて読んでくださっている方いらっしゃるかもしれません、迷惑をお掛けしています。でも、頑張っていますので、見捨てないで下さいね。

「9」 満員電車（前書き）

熱の下がった勇は、月曜日に登校します。
でも、いつも待っているはずの鈴ちゃんは……

こっちみて

「9」 満員電車

昨日の熱は嘘のように引いていたが、身体は少しだるかった。でも、学校には行く事にしたんだ。

いつもなら、ずる休みするところだけど、今日は家で寝てるなんて出来そうにない。

色々な事を、考えすぎてしまいそうで嫌だったただけなんだけど。あれっ？ 鈴ちゃんがいない。

いつもなら駅前で待つてるはずの鈴ちゃんがいない。

体調が悪くて休む時には、必ずオバサンが連絡してくるはずだし、どうしたんだろう。

「兄貴、鈴ちゃんがいない」

兄貴は気にする様子もなく、歩き続けている。

「兄貴っ鈴ちゃんがっ」

「聞こえてるよ。昨日言ったじゃないか。鈴は変わったって。これからは途中下車はしないそうだ。一人で学校に行くと言っていた」

「……」

何だよ、それ。

鈴ちゃんは、俺に前を歩いて欲しくないって事か。

あくまでも、俺は後ろからついて行かなきゃいけない存在なのか？俺は、自然と足が止まっていた。

兄貴が振り向いて、2、3歩戻ってくると、腕をひっぱった。

「いつまでそうやって同じとこにいるつもりだ。鈴がいないと前にも進めないか。俺の弟はかなり弱虫ってところか」

「なに言ってるんだよ。鈴ちゃんなんかいなかったって、イヤ兄貴だっ
ていなくたっていい。一人で大丈夫なんだ。ほっといてくれ！」

俺は、兄貴の手を振り切って駆け出した。

鈴ちゃんも、兄貴もなにが言いたい、クソッ……。

じゃア、俺は何がしたいんだ？

鈴ちゃんの前を歩くって決めて、宣言して、それから？ どうするんだ、何をするんだ、何がしたいんだ。

俺は、グルグルと回る思考のまま、入ってきたばかりの電車に乗り込んだ。

そのまま、人ごみの中に身体を埋め込んでいく。

満員の車内に飲み込まれた身体は、ギョウギョウに押されて息苦しい。

毎朝、兄貴と二人で、この苦しさから鈴ちゃんを守ってきたんだっけ。

今日は無事に過ごせたのか、気になる。

そっだ、俺は鈴ちゃんを守ってきたんだ。

そりゃあ、兄貴と二人だったけど、守って来たんだ、いつでも分かった……、俺がしたかった事。

俺は、一人で鈴ちゃんを守る男になりたかったんだ。

それを、鈴ちゃんが認めてくれるまで、鈴ちゃんの前を歩いて、振り返りたくなかった。

でも、それって自分本位だったのかも知れない。

俺が、一人前を歩いていけば、兄貴がいなくなったら鈴ちゃんは一人になる。

もしかしたら、一人でも大丈夫なように、鈴ちゃんは強くなるうとしてるのかも知れない。

俺の決心は、鈴ちゃんにも影響してたんだ。

昨日、兄貴が言ってたのはこの事だろうか？

ガタンッ

電車が大きく揺れた拍子に、誰かが俺の背中当たってきた。

「よう！ 勇、おっはよ。珍しいじゃネーカ。兄貴とれいちゃんはどしたの？」

冬馬だ、小学校からずっと一緒のくされ縁のやつ。

だから、鈴ちゃんが俺の初恋の相手だって知ってる数少ない友達だ。

こっちみて

電車の揺れを利用して、少し離れたところから無理やり、移動したらしい。

運動神経と反射神経だけは、抜群なんだよなコイツ。

「これからは、ずっと俺一人。よろしくな」

冬馬は、わざとらしく口と目を大きく開いた。

「えっえっ、もしかして失恋？」

「……」

「……ごめん……」

俺の表情が、あまりにも暗かったのか、冬馬はうな垂れて謝ってきた。

「ちげーよ。失恋にもなってるねーの。ってかこんなトコで話すことじゃねーし」

「うん……そ、だな」

その後は、最近ハマってるゲームの話や、冬馬が見に行った映画の話聞いていて、あつと言う間に学校の近くの駅に着いた。

電車はその頃にはかなり空いていて、降りるのも楽だった。

俺は、そつと電車を振り返った。

鈴ちゃんと兄貴の降りる駅は、いつも一気に人が降りるから、けっこう危険な時がある。

「鈴ちゃん、大丈夫だったかな……」

俺は、思わず呟いた自分の声にビックリして、首を振った。

こっちみて

「そんな事、あるはずネーだろーが」

俺は、昼休みに冬馬と一緒に校舎の屋上に来ていた。

結構お気に入りの場所んだけど、競争率も高い、今日だってバカップルにタッチの差で勝利したんだ。

俺の横にゴロンと転がってき冬馬は、俺と同じ様に空を見つめた。「俺は、ありだと思っけどなア。れいちゃんは、きつと勇のこと好きなんだよ」

「鈴ちゃんの目には、俺なんか入って無いの。いつだってヨソ見てんだからサ」

冬馬はガバツと起き上がった。

「だからじゃネーカ。恥ずかしくて見れないって可愛いじゃん。そうだって」

俺は、呆れて首を振った。

「鈴ちゃんの見た目に騙されちゃダメなんだよ。鈴ちゃんは、恥ずかしくて目を見られないような柔な女じゃねーんだよ。組み手の時なんか、俺の目を見据えて突き込んでくる。俺は当然動けない。小さい時からそうなんだ。お前は間違ってる」

俺は立ち上がって尻の汚れを払った。

「冬馬、休み時間終わるぞ。行かないのか」

冬馬は、むくつと起き上がると、なんとも言えない顔で俺を見つめた。

「お前って、ホントありえねー奴。呆れるわ」

そう言ったかと思うと、冬馬は俺を追い抜かして階段を下りて行った。

なんでこう、俺の周りの奴は皆、最近になって俺の分からない言葉で話すんだ……

誰か教えてくれよ……

何の話をしてるんだ……

こっちみて

「9」 満員電車（後書き）

勇は、周りの人間に見えていることが中々見えないうつです。

こっちみて

「10」 久しぶり（前書き）

勇は、鈴ちゃんと、しばらく話もしていません。
このまま、遠い存在になって行くのかなア？

こっちみて

「10」 久しぶり

県大会を明日にひかえていた今週は、稽古の間も話などしている暇は無かった。

兄貴と鈴ちゃんは、相変わらず学校の部活を終えてから道場にやっ来ていた。

中学までは、道場だけで稽古をして、各大会にも道場から参加申請をするが、高校生になると学校毎の団体戦があったりで、学校からの出場申請になる。

だから、兄貴と鈴ちゃんは同じ高校から、俺は自分の高校からの出場となるわけだけど、二人と違って俺のトコは弱小だから、団体戦なんて無理、俺は個人戦の組み手だけにエントリーした。

兄貴と鈴ちゃんは、今到着したばかりなのに、直ぐに形の練習にはいった。

二人は、高校の団体戦、個人の組み手と形の3つにエントリーしている。

え？俺は形に出ないのかって？それは、ここの師範が許してくれないんだ。

師範いわく、『真剣に取り組まん者に形はできん』らしい。

俺も、結構いけてるはずなんだけど、お許しは出ないんだ。

俺は、二人を見つめてボーっとしてたらしい、師範の平手が頭に飛んできた。

「お前は何をやっとする。稽古に身が入らんのか？あの二人の所に行きたければ、お前も己を知ることじゃ。己の求めているものに気が付かにならん」

ジロリと睨んでから、師範はにやりと笑って他の道場生の所に歩いていってしまった。

「またかよ……」

この道場をまとめている師範は、70才近い歳のはずなんだけど、

元気で皮肉屋で、食べないジジイだ。

「でも、何故か皆に慕われ、人が集まってくるから、不思議だ。って、そう言ってる俺もけっこう好きなんだけどね。」

俺は、溜め息を付きながら、目の前のサンドバッグに向かい合っ
た。

「勇！ 組み手の相手しろや」

先輩が、三人こっちを見ている。

先輩といつても、大学生で俺よりもかなり背が高い。

結構キツイ練習になりそうで、ちよつとイヤだけど断る事はできない。

「ういゝつす」

俺は、走って先輩の所に行く。

これで、今夜も鈴ちゃんとは話も出来ないで終わるんだろうな。

一週間前のあの夜から、挨拶ぐらいしかしてないのに……

明日は兄貴も鈴ちゃんも俺も、学校ではなく、道場からのバスに乗っていく。

その時には、少しくらい話が出来るだろうか……

今までこんなにも長く鈴ちゃんと話さないなんて無かったから、凄く辛い。

話をしない、近くにいない事が、俺を不安にさせていた。

でも、鈴ちゃんは何んとも無いみたいだ……

「バコンッ！！」

「グエッ！」

「おい勇！ 大丈夫か！」

「……………」

甘つちよろい事を考えながら組み手をしてたら、先輩の中段蹴りを思いっきり腹筋きかせてない腹にくらった。

目の前が、白くなる……俺は、やっぱりバカだ……

「勇ちゃんっ大丈夫？ 勇ちゃん……」
道場の角に運ばれたらしい俺に、鈴ちゃんが声を掛けてくる。
背中を摩ってるのは、鈴ちゃんの手かなア……にしては、力つよすぎ？

と思つたら、後ろから声がした。

「勇、お前何やってんだ。組み手の最中にボーっと考え事してただろ。死にたいのか、先輩方相手に、そんな甘くないのは分かっているだろうが」

やっぱり兄貴だった。

「やっぱり兄貴か……」

兄貴は怒ったように、ドンッと俺の背中を叩いた。

「イツテ！」

「何がやっぱりなんだ、俺ぐらいしかバカな弟の背中を摩ってやる奴など、いるわけ無いだろーが。さア勇はもう大丈夫だろう。ほら、鈴も練習が途中だ、少し休んだら直ぐに再開だからな」

兄貴はそれだけ言うと、自分は立ち上がって練習を始めに行ってしまった。

俺と鈴ちゃんは、久しぶりだというのに二人だけになってしまった……

俺は、鈴ちゃんの方に向いて横になってるから、直ぐ上で覗き込んでた鈴ちゃんの瞳を、まともに見てしまった……

「ひっひさっひさっしぶりだな……っっておかしいか……」

「……おかしいよ、毎日会ってる」

「はは……そつだな、でも話してないからさ、何か……」

鈴ちゃんは、俺の目を見つめたまま動かない。

お願いだから、何か言ってくれ……

「こんな事、初めてだから……淋しかった。でも、勇ちゃん前に進むって、前しか見ないって言うから、我慢したんだよ。甘えちゃダメだって。応援しようって決めたんだから」

応援って、何を？ 鈴ちゃんへの俺の気持ちを、鈴ちゃんが応援してくれるのかよ、それって、俺のこと好き？ とか……まさか……俺の心臓がドクンッと鳴った。

まさかと思いつつ、期待してしまっ……

鈴ちゃんは俺の目を見つめたままだ、どうしたらいい？ なんて言えばいいんだ。

その時、鈴ちゃんがニツコリ笑った。

「頑張って、応援してるから。今回の大会に掛けてるんでしょっ勇ちゃんも」

へっ？ 空手がよ……

俺、今どんな顔してんだろっ……きつと間のぬけた顔になってる

……

そんな事だろーよ、鈴ちゃんあんたには、いつも昇らされては落とされる。

って、それは俺の勝手な思い込みからきてるんだっけ。

何にも分かってねーって、残酷だよな……

明日の試合ですか、そんなに真剣に考えられたんじゃ、頑張る？ しかない？

でも、変わるとしたら空手からかもな、俺と鈴ちゃんの出発点も空手だからナ。

「うん、頑張るわ。明日はトロフィー目指すぞ」

「勇ちゃん、1年から3年まで一緒だよ。弘にいと当たるかも……」
鈴ちゃん、あんた応援してるのか、水を差してるのか、どっちなんだ。

「でもね、頑張れば勝てるかも。弘にいがお腹の調子悪かったりし

たら、いけるかも。勇ちゃんは、真剣にやればかなり強いからね」

「鈴ちゃん……フォローになってないんですけど」

「あっごめんなさい……でも、勇ちゃんが強いつて言うのはホントだよ。私は知ってるもん」

「ありがとう鈴ちゃん。」

いつも鈴ちゃんにやられてる男に、強いつて言うってくれる、そんなあなたが……なぜか好きです。

俺は立ち上がると、鈴ちゃんの腕を引っ張って立ち上がらせた。

「鈴ちゃんも練習の途中だろ。早く行けよ、俺、もう大丈夫だから」
「うん」

走り去る、鈴ちゃんの後姿をじっと見つめた。

いつも見ていた、鈴ちゃんの後姿。

これからは、見ないって決めた背中だけど、いつか、その背中でと守ってやりたい。

鈴ちゃんに、守って欲しいって思ってもらえる男になりたい。

明日は、どこまで出来るかわかんねーけど、頑張ってみよう。

兄貴とは当たりませんように、神様をお願いしとかないとな。

ふっと、視線を動かすと、兄貴が睨みつけている。

スツと俺に向かって握りこぶしを上げてみせる。

まさかっそれは宣戦布告じゃないよな、ア・ニ・キ……

こっちみて

「10」 久しぶり（後書き）

弘弥と試合で戦うなんて、弘弥は全国制覇を何度も達成した男、弟にも容赦は無いはず。
神様、お願いします！！

こっちみて

「11」 トロフィー（前書き）

勇と弘弥は昔から仲の良い兄弟でした。

というか、勇が弘弥の後を追いかけてたって感じですか？

こっちみて

「11」 トロフィー

明日の大会を控えて、今日の稽古は4時で終わった。

今日は、鈴ちゃんのパパのお迎えで、俺と兄貴も家まで送ってもらうことになっていた。

「いつもお世話になりますっ」って兄貴はさわやかに挨拶してる。

俺は、いつもの様に「ちーっす」って小さな声で言ったただけだった。

それでも、鈴パパはニツコリと優しくそんな笑顔で答えてくれる。

俺は、このオジサンも大好きなんだ。

オジサンは、鈴ちゃんを見つめる時はこれでもかって程、目を細めてて、可愛くって仕方がないんだって誰が見ても分かる、穏やかな目をしている。

俺も、鈴ちゃんの家族なら、ドキドキしたり、心臓がドクンって上がったたり、ドーンと下がったりしなくて済むのかなァ……俺が家族なら、鈴ちゃんの弟か……誕生日は俺のが遅い……

俺んちに着くと、オジサンにお礼を言って、車を降りた。

兄貴は、明日に備えてゆっくり休むように、鈴ちゃんに言った。

でも、俺は何も言わない……でも、鈴ちゃんが俺をジツと見てるのはわかった。

「勇ちゃん、明日ね」

鈴ちゃんは、長い睫毛を揺らして微笑んで言った。

俺は、その微笑に、ドクンと鳴った自分の心臓に呆れた。

「……うん……あした」

俺は、走り去っていく鈴パパの車を、そっと見ていた。

兄貴は、そんな俺のシャツの背中を引っつかんで、家に引きずり込んだ。

「ただいまァ〜母さん風呂沸いてる？ 家の前で捨て猫拾ったァ」

「沸いてるわよ。って何してんの弘ったら、あら勇どうしたの？」

ホントに捨て猫みたいねエ……また、鈴ちゃんに振られたんだ。ちつちやイ頃から何回目？」

母さん……あんたにはデリカシーってものは無い……無いんだっ
た……

でも、今回だけは、そつとしいて欲しかったよ……

俺は、なぜかそのまま兄貴に風呂まで引きずられていった。

「早く入れ！」

兄貴に急かされながら、俺は服を脱いで風呂に入り、身体を洗い、シャンプーを始めた。

その間、兄貴は脱衣所の方から何か言ってたけど、何なのかははつきり聞こえない。

その時、いきなり俺の頭を大きな手がガツシツと掴んでゴシゴシ洗い始めた。

「痛っ何すんだよ……」

「何って、お前の頭を洗うんだろっが、小さい頃はいつも俺がお前の頭を洗ってやってじゃないか」

「もう子供じゃねーだろーが。キモイッて」

「なんだと！ 男は裸の付き合いが一番だ。連れない事を言うんじゃない」

何を考えているのか、兄貴は鼻歌交じりに俺の頭を洗ってる。

「勇、明日の試合頑張るんだってな！ よく言った、俺はお前のその覚悟を待ってたんだ。先週の土曜日のことから気にはなってたが、良い答えを出したな」

「土曜日って、なんで知ってたんのさ……って鈴ちゃんか！」

「他に、誰に聞くんた」

「……」

兄貴は、俺より大きな長い指で、まだ俺の頭をゴシゴシ洗ってる。
「鈴ちゃんは、昔から、兄貴には何でも話すんだ。俺の知らないことでも、いつつも兄貴は知ってたもんな」

「ヤキモチか？ いつまでも子供だな勇は、でも、男が一度口にし

たら、絶対に貫け。もう二度と鈴の後ろを歩くな。いつも、鈴の前で鈴を引っ張っていけ」

「どう言う意味っ!」

兄貴は、熱めのシャワーを俺の頭に掛けて、シャンプーを流しに掛かった。

「そんな事、自分で考える。明日の試合は、お前の全てを掛けなきゃなっ。さっ洗えた。ほら、代わってくれ」

俺は、兄貴に言われるままに、シャワーの前をあげわたし、バスルームを後にしようとした。

そつと振り返ると、俺を見ている兄貴の目と視線が合った。

兄貴は、二カツと笑うと、自分の頭を指さして「洗ってくれるのか?」と聞いた。

「あり得ないから」

「冷たい奴だなアお前は」

俺は何も言わずに、バスルームから出た。

兄貴は、何を言いたくて、俺の頭を洗いに来たんだ……

俺は、脱衣所で頭を拭いていた、何だか、兄貴にゴシゴシと洗われた髪は、パサパサしていた。

「クソ兄貴、リンスすんの忘れやがって」

と、その時、バスルームから

「うおオーーーーー」

と咆哮が聞こえて、俺の身体は一瞬飛び上がった。

「ゆうーーーーーがんばれーーーーー!!!」

俺の兄貴は、凄く頭が良くて、空手が強くて、人望もある。でも、ちよつと変わってる。

昔から、俺と鈴ちゃんの仕事になると、おせっかいにも程があると言いたくなるほど、世話を焼き、気に掛けるところがあった。

兄貴は、俺も鈴ちゃんも同じに扱ってきた、それに答えたのが鈴ちゃん、答えようとしなかったのが俺だ……

「兄貴……明日は頑張るから……」

まだ吼えている兄貴を、バスルームに残して、俺は一人部屋に上がった。

俺は、風呂場から自分の部屋に上がった。

髪の毛をタオルで拭きながら、ベットに腰掛ける。

「あっと、髪の毛ベットに落したら、母さんに怒られんだっけ。しまった……」

髪の毛を拾いながら、何となくさっきの兄貴の言葉が気になってきた。

土曜日の事……か、鈴ちゃんは兄貴に何て話したんだろう。

やっぱり、俺が空手を頑張る気になり始めたとかって、言ったのかなア……

本当は、全然違うんですけど、鈴ちゃんへの気持ちはどうしたらいいか分からなくなってる、弟みたいに後ろばかり着いていくのがイヤになっただけなんだ。

兄貴と鈴ちゃんが付き合ってるって誤解して、兄貴がいる場所に俺がいたいと思っただけなんだ。

……でも、それって、やっぱり空手を頑張るって事につながるのかな……

こっちみて

トロフィー

あの小1の初めての試合で貰った、俺の空手人生でたった一つの

鈴ちゃんの涙とひきかえに貰ったトロフィー……

いらなくなつたゴミみたいに重いトロフィーを、俺は今、心の中
から捨てなきゃいけないのかもしれない。

いらないつて思ったトロフィーだけど、今でも後生大事に持って
いる。

それを、俺は本当に捨てられるのか？

俺は、本棚の角に追いやつた、ホコリまみれのトロフィーをジツ
と見つめた。

本棚からトロフィーを持ち上げたら、ホコリが舞い上がった。

キレイ好きの母さんは、兄貴や俺の部屋もけっこう勝手に入って
きては掃除している。

エロ本もろくにおいては置けないんだけど、その母さんが、触つ
た様子が無い。

何となく、母さんの思いやりみたいのが感じられて、恥ずかしい
ような、迷惑なような妙な感じがした。

「ありがとう母さん」

俺は、何を言つてんだ……こりゃ、相当悩みは深いかもしれない

……

下から俺を呼ぶ兄貴の声が聞こえた。

晩飯か、今夜は何かな？

俺の恋の悩みには、食欲不振は関係ないらしい。

腹が、キュルルウ〜と鳴つた。

こっちみて

「11」 トロフィー（後書き）

勇にも、やっと何となく何かが見えてき始めたのかも知れませんが、いつも読んで下さってありがとうございます。

なかなか、前に進んでいきませんが、勇に負けないように頑張って書いていきますので、宜しくお願いします。

「12」 オヤジとオニギリ（前書き）

今回は、家族を中心に描いています。
特に、初めてお父さんが登場します。
って最後かもですけどね。

こっちみて

「12」 オヤジとオニギリ

俺は、めずらしく目覚まし時計よりも早く起きた。

人生っていつても16年弱だけど、その中で初めてじゃねーかなア。

「んんん何か気分いいし」

俺は思いつきり伸びをしてから、カーテンの隙間から差し込む朝日にキラキラと輝くトロフィーを見つめた。

昨日の夜に、きれいに磨いたんだ。

俺は、ベットから降りて机の上のトロフィーを持ち上げた。

「今日は、一緒に行くかって、俺って何やってんのトロフィーに話しかけて……」

そうだ、小1の時から、コイツが俺の最大の重荷で、最高の宝物だったんだ。

それにやっと気付いた。

今日、コイツを持って試合に行こうと決めていた。

お守りになつてくれそうな気がしたんだ。

俺は、スポーツタオルにトロフィーを包むとバッグの底に入れた。誰にも見つからないように、俺の心の底にしまい込むように、大事に大事に入れて、その上に防具一式と胴衣を入れた。

「早いけど、朝飯でも食うかな？」

カーテンを開けて、朝日を浴びてから、朝食を取りに部屋を出る

……

今の時間は、朝の6時、試合会場に向かうバスに乗るための集合時間は、午前8時だ。

「まだまだ……時間はある、何作って食おうかなアって？」

「おはよー」

「まだ誰も起きていないと思っていたのに、オヤジが起きていた。」

「オヤジ、早いのかな？」

「ああっ今日はなア、マウンテンバイクの同好会仲間とツーリングだ。もう少ししたら出かけるがな」

「母さんは？ 朝メシ自分で作ったんだ」

「当たり前だろ。ツーリングの日に、母さんは起きてこない、と言うか起きてくれとは言えんがな……」

「母さん、こえくもんな」

「そう言うこと。自分でしなさいとかって怒るからククッ」

「なぜか、オヤジは嬉しそうに笑ってる。自分が一人で出かける日に、母さんが機嫌が悪いのを、喜んでいるような気がした。」

「変なの？」

「オヤジの趣味は、マウンテンバイクだ。」

「だっていつても、俺には自転車でサイクリングとしか思えない。」

「でも、オヤジにとっては大切な趣味らしく、メンテナンスから何から自分でやって、2〜3ヶ月に一度は今日のようにツーリング？に出かけて行く。」

「なアオヤジ？ 前から思ってたんだけど、マウンテンバイクって自転車だろ？ 何時間も走ってばっかで何が楽しいのか、俺ワカンネーんだけど」

「オヤジは、コーヒーを飲みながら、俺をジロツと見た。」

「お前、失礼な奴だなア。そりゃアお前等みたいに勝ち負けを競うスポーツは、何が目的なのかハッキリしてるんだろっかな……勝つために、何をするのかだろ？」

「ん〜そんな感じかなア」

「なんだ分かってないのか」

「ウン…いや…きつと、そうかな？ 師範は、勝つ事が全てじゃないって言うけど、勝つために何をするか、どう鍛錬するかってのは、当たってるんだらうなア」

オヤジは、ニヤツと笑った。

「あのな勇、父さんはお前や弘弥のような格闘技は苦手なんだ。母さんなら、きつと強いだらうけどナ。でも、マウンテンバイクや、水泳は好きだな。もしかしたら、相手がいるスポーツより、一人でするスポーツが合ってるからかも知れない。どうも、相手に合わせたり、相手を窺がって戦うのは苦手だ」

俺は、パンにバターを塗りながらオヤジの話を聞いている。

パンは少し焦げすぎたかもしれない。

「ふ〜ん、そうなんだ」

「まア、自分だけでも出来るもの、自分と向き合うものが好きなのかもしれない。バイクも水泳も、自分に勝てなくては、前には進めん俺は、オヤジのその言葉に思わず、オヤジの顔を真剣に見てしまっていた。

「自分に勝つ？」

「ああ、一人でする分、誰も見てないし止めないし励ましてもくれん。いつ止めてもいいし、目標まで頑張っても良い。自分次第だつて事だ」

「自分次第……」

オヤジは、食べ終えた食器を持って、椅子から立ち上がって、俺に笑いかけた。

「それは、空手も同じじゃないのか？ 師範が言う、勝つ事が全てじゃないってのは、そう言う事かもしれないぞ……勇……自分に勝てなきゃ、誰に勝っても意味は無いんじゃないか？」

俺は、口に入れたパンを飲み込めずにモゴモゴと口を動かしていた。

こっちみて

牛乳で流し込んだ時、オヤジは、俺の頭を何年かぶりにクシャと撫でてからダイニングから出て行った。

いつもは母さんに怒られてばかりオヤジが、なぜかカツコよく感じた。

今朝は変な朝だ……

俺は、オヤジが出掛けた後も、ゆつくりと食べ続けてた。

「勇？ めずらしいわねエ……今日は何かの天変地異に気をつけおかなきゃ。あんたが勝手に起きて、自分でトーストして食べてるなんてね？ あれ？ 勇うゝ！！」

やっべ！ 母さんが起きてくるよりも先に逃げとくんだった。

「あんた！ 朝からパン何枚食べてんのよ。弘弥のが無いじゃない。あつあゝもう！ ご飯炊かなきゃって、間に合わないわ。えゝと冷凍庫につと、あつたあつたオニギリしといたのよ。弘弥が起きて来たら、チンってしてあげよつと」

母さんは、オニギリがあつた事を思い出して、ひとまず落ち着いたらしい。

でもないか……

「勇う……ちゃん？ 一人でパンを一斤半も食べるってどういうお腹なの？ 毎日、毎日そんなに食べられたら、うちは破産ですけど」

「いや、でも母さん。オヤジが食ったとは思わないの？」

母さんは、チラリと俺の顔を意地悪く見た。

「父さんはね、あの人は毎日トーストを1枚しか食べないの。でも、

ツーリングに行く時は、オニギリを3つも食べるのよ。そうしないとエネルギーが足りないんだって。だから、昨日の夜に炊き立てのご飯でオニギリして冷凍しといたの！ だから、一斤半あったパンは、あんたが食べたにきまつてるでしょ。誤魔化されないんだからね母さんは！」

怒ってる母さんを目の前にしても、俺は気になってることを聞かずにはいられなかった。

オニギリの事だ。

「そっそれよりさ、ねエ母さん、オヤジがオニギリ食ってくって知ってんなら、朝になってから握ってやれば良いじゃん。何で夜にするの？ 冷凍までしてさ」

母さんは、恐ろしいまでに冷ややかにニッコリ笑った。

「父さんは、自分のしたい事をしに行くの。休みの日に母さん一人置いてね。置いて行くからには覚悟がいるでしょう。その覚悟が朝ごはんよ！ 私とマウンテンバイクとどっちが大事なのって言われたくないんじゃない？ 父さんもね」

それって、母さんあんたは、マウンテンバイクにヤキモチ妬いてるって事ですか？

どつりで、オヤジのさつき見せた嬉しそうな顔の意味が分かったような気がした。

「そっか、オヤジもマウンテンバイクとは言いにくいよなアアア…

…しまった！」

母さんの顔がピツクと引きつったように見えた。

「勇ついい度胸だね」

ニヤツと恐ろしい笑顔を見せてから、母さんは俺の前の椅子にドカッと座った。

「パンを一斤半も食べたんだから、試合、頑張っておいでね。か・あ・さ・ん期待してるわ」

そう言つと、俺の牛乳をとってゴクゴクと飲み干した。

……一度も言わなかったセリフ、今日に限って言うか……はらい

せ？

俺は、母さんの顔を恐る恐る見た。

怒ってるふうではない、ってかいつもの笑顔だ。

やっぱり、母さんは普通じゃない。

怒ってるように見えて、怒ってないし、楽しそうにしてて思いっ切り怒ってたりする。

母さんが、空手で俺に頑張っておいでなんて言った事は、今まで一度も無い。

そう言われるのがイヤだと、気付いてでもいるかの様に、ただの一度も言わなかった。

それを今日に限って言ったのは、他に意味があるから？　なのか？　俺が、母さんの様子を窺っていると、母さんは、立ち上がって冷蔵庫を開けて中を覗いた。

「スクランブル交差点とオ、目玉オヤジイどっちがいい？」

あの…… 思いつ切りオヤジギャグなんですけど、でも答えないと怒るから、素直に答えておこう。

「じゃあ、目玉オヤジイをお願いします」

「じゃあ俺も！　目玉オヤジイ！　おッ勇、起きてたか。気合十分だなこれは！！」

って兄貴だ。

朝からハイテンションな奴だなア……。

やっぱり、変な朝だ…… 今日早めに家を出よう……

こっちみて

「12」 オヤジとオニギリ（後書き）

勇の家は、何となく可笑しいような、何処にでもあるような？ 不思議な家庭です。 不

我が家に似てるかも？ です。
想像力に欠けて申し訳ありません。

こっちみて

「13」 思春期の純情少年（前書き）

試合会場に向かうバスの中は、勇に喜びと混乱と苦悩を与えた様です。

こっちみて

集合時間には少し早かったけど、兄貴に合わせて俺も早くから道場前に来ていた。

兄貴は、今日の出場選手の点呼をとるため、バスの前に立っていたが、俺は早々にバスに乗り込んだ。

女子の声が聞こえてきた、もちろん鈴ちゃんじゃない。

鈴ちゃんの声は、ちよつとハスキーなのに可愛い、間違いようの無い特別な声だ。

って俺って、やっぱあきらめ悪いわ……

鈴ちゃんに好きな人がいるって言われても、俺の気持ちは変わらない、いや変わることなんて無いような気がする。

だって、もう10年以上恋してるんだから……

バスに乗り込んできた女子は2人も、俺と鈴ちゃんと同じ歳で2人共に最近彼氏が出来たと聞いてるけど、その話で盛り上がっているようだ。

まア俺には、全く関係ない話だけど、うるさいのが気に入らない。俺は、女二人の声を頭から追い出すために、今朝オヤジが言っていた事を考え始めた。

『自分自身に勝てなきゃ、誰に勝っても意味は無いんじゃないかな』
オヤジは確か、そう言っただ。

自分に勝つって、何なんだ？ よく分からんねーよ……

じゃア今まで、俺が勝てなかったのは？……ど・う・し・て……
だっけ？

忘れそうなほど、遠い記憶？ いや、分かっているはずさ……

鈴ちゃんを泣かしてしまったトラウマ……

今でも、俺に負けたら、鈴ちゃんは泣くんだろうか？

負けず嫌い……だもんなア鈴ちゃん。

俺は？ 鈴ちゃんが泣いたら？ やっぱイヤだっ成長してねー

なア俺……

何のためにトロフィーを持ってきたかわかんねーじゃねーか……
トロフィーは、迷ってる俺の心の象徴、あの時捨ててしまった勝ちたいつて強い気持ちそのもの。

ドカツ!!

その時、いきなり鈴ちゃんが俺の隣に座ってきた。

「もう！ ナツちゃんもミサちゃんも、彼氏の話ばっかなんだから
つついていけないわ。一緒に座ろうと思ってたのにつ聞いてられな
い」

「……」

鈴ちゃんは、えらく怒っているみたいだ。

俺は、何も返す言葉が見つからなくて黙っていた。

「勇ちゃん、肩かしてね。私ねるから。昨日あんまり寝れなかった
の。緊張してるのかな？」

鈴ちゃんは、俺の返事なんか聞く気もないみたいで、もう目を閉
じてしまっている。

俺より背は高いはずなのに、座ると鈴ちゃんのほうが小さい。

って、俺、足短いつてか？ 確かに……兄貴や鈴ちゃんよりは短
いですつつてクソツ

俺の肩に頭を乗せて、スースー息をしながら目を閉じてる鈴ちゃ
んは、やっぱり可愛すぎるくらい可愛くて、やっぱり泣かしたくな
い特別を感じてしまう。

振られたばっかりなのに、俺は懲りない奴だ、まったく……

俺は、そつと鈴ちゃんの頭に、自分の頭を寄せて、目を閉じた。
あまりにも接近した為に、鈴ちゃんの髪の毛の香りがした。

甘いような香りはシャンプーのものだろうか？ それとも鈴ちゃ
ん自身の匂いなのかな？ 鼻の穴を大きく広げて、思いつ切り吸
い込んでみる。

頭がクラクラしてきた……胸はドキドキしてる。

ぼーっとした頭で、俺は何を考えてたんだろう……鈴ちゃんの髪

の中に、自分の顔を埋めた。

むせ返るような甘い匂いとは別の、もっともっと体中がドキドキするような匂いがした……俺は頭がおかしくなったのかもしれない。ボカツ!!

俺の頭を、誰かが思いつきり殴った。

「何やってる。お前はここがバスの中だって事、分かってるか？」
目を開けると、呆れた顔の兄貴と目が合った。

「何も……してねーよ」

「してたら、これじゃ済まんだろーが！」

兄貴は、拳を握ってからニーツと笑ってそのまま前の席に座った。やっぱア〜。俺マジでやばかったんじゃないか？

チラリと見た鈴ちゃんは、すやすやと眠っていた。

俺は、もう二度と鈴ちゃんの髪の毛の匂いをかがないように、持っていたタオルを顔にかぶった。

これから、約一時間、神様、俺を助けて下さい。

いや、鈴ちゃんを守って下さい。

こんな変な俺から、鈴ちゃんを守ってください。

鈴ちゃんと、鈴ちゃんの好きな人のために……

バスは直ぐに発車した。

落ち着かない俺の心のように、ガタガタと揺れている。

元々、道場から試合に行く高校生なんて、あんまりいないから必然的に数は少なく、バスは小さい。

男子3名に女子4名、師範や先生方を合わせても、11人って事は、小型のバスなわけで、かなり揺れる。

揺れる度に、鈴ちゃんの身体が俺に当たって、匂いをかかなくなっても、思春期の純情少年な俺には、十分に刺激が強い。

それなのに、鈴ちゃんときたら、どんどん俺に寄りかかって、今にも俺の膝に倒れこみそうになってる。

このまま倒れこまれたら、考えただけでもゾツとする状況に、今の俺は追い込まれてるんだ。

きつと、男なら分かってくれるはずだ、すつごくヤバイ状況だつて。

俺は、それを回避するために、鈴ちゃんの肩に空いた方の手をかけて、鈴ちゃんを元の位置に戻そうと努力した。

鈴ちゃんの頭は、かくんつと揺れて元あった俺の肩に戻った。

でも、その時、ずれたタオルの隙間から、鈴ちゃんの寝顔が見えた。

少しだけ開いたプツクリした唇から、寝息が漏れてて、可愛いのに凄くドキツとさせる色気がある。

俺は、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「勇ちゃん……」

鈴ちゃんが、いきなり俺の名前を呼んだ。

心臓が、ドクンと鳴って、俺は固まった。

変な事を考えてたのがバレタと思った。

鈴ちゃんは、クスクスつと笑った。

「勇ちゃんのバーカ……ンフツ……」

鈴ちゃんは、スースーと寝息を立てている。

まだ眠ってるみたいだ、夢でも見てるのか？

その夢で、俺は何をやったんだ？ バーカつてそりゃないでしょ

鈴さま……

俺の男心は、まだまだ揺れっぱなしだった。

こっちみて

なんやかやと慌てているうちに、バスは試合会場に到着した。

俺は、鈴ちゃんをゆすって起こして、皆と一緒にバスを降りた。女子のナツミとミサは先に降りていて、鈴ちゃんに走り寄って何やらコソコソ話し始めた。

二人の話を聞いていた鈴ちゃんが、俺のほうをチラリと見た。

まさか……俺の邪まな想いが、あの二人にばれていた……なんて事、ない、よ、な……。

鈴ちゃんが、プツと笑ってもう一度俺を見た。

「勇ちゃんのバーカ」

鈴ちゃんは、一言だけ言うと、ナツミとミサに付いて先に歩いていった。

三人は、キャッキヤとはしゃぎながら、肩を小突きあったりして、楽しそうだ。

ばれてなきや、それでいい。

振った男の邪まな想いは、鈴ちゃんにとって迷惑なだけだ。

俺の心が、失恋を認めて、立ち直るには、鈴ちゃんは近くにいないのかもしれない。

いつまで経っても、鈴ちゃんから離れられないかもしれない……

このままじゃ、ダメなのかなア？

「勇、行こうか。こんな所でまったりしてたら、開会式が終わってしまう。朝から、いちやついて楽しい思いしたんだ、その分、一日頑張れるさ。な！」

いつの間にそこにいたのか、俺の背中を兄貴がポンスと叩いた。

ゆっくり微笑むその顔に、俺はホツとして大きな溜め息をついた。

「バカが。これから試合って奴が、溜め息ついてどうする。気合が足りんぞ」

兄貴は、俺の頭を、拳で殴った。

クソツ、マジ痛いんですけど……でも、ありがと兄貴……

兄貴に殴られると元気が出る？ 気がする。

俺と兄貴も、武道館に向かって歩き出した。

今日、俺は自分に勝つ方法を、見つけられるだろうか……

こっちみて

俺は、武道館の屋根の上に広がる空に目をやった。
さわやかな青色の空は、何も教えてはくれないけど……
どこまでも真っ直ぐに、こっちを見ているような気がした。

「13」 思春期の純情少年（後書き）

次話では、勇の？ ライバル登場です。

恋のライバルなのか、それとも空手のライバルなのか？
難しいところですね。

こっちみて

「14」 身体に気をつける（前書き）

開会式で、あまり会いたくない奴に会ってしまつ勇。

空手をやってる奴なんだから、会って当たり前なんだけど、顔を見るだけで、嫌な気分になつてしまつ……

こっちみて

「14」 身体に気をつける

試合会場に入ると、直ぐに開会式が始まった。

長つたらしい挨拶や、祝電の披露、試合ルールの説明を、俺はぼーっとしながら聞いていた。

周りの拍手の音に、選手宣誓が終わった事を知った。

走って戻る選手は、確か昨年の大会で団体戦優勝チームにいた奴だ。

俺は、兄貴の応援に来ていて、その試合を見ていた、兄貴の高校との決勝戦だ。

去年は、副将だったはずだから、去年から大将の兄貴とは当たっていない。

今年もいるって事は二年だったのか。

結構、身体も大きくなってがっすりタイプのそいつを眺めていたら、そいつが戻ったチームの中に、見知った顔が見えた。

毎年、中学の大会で決勝コートに上がってきた奴、たちかわかずひと立川一人だ。

空手の有名校に入って、一年生で試合に出場かよ、スゲー奴だなア、って兄貴はあの高校からスカウトされてたけど、なぜか今の高校を選んだ。

もしかすると、スカウトなんてされない俺の為だったのかもしれない、なのに俺はしくじったって訳、不甲斐ない弟ですわ。

立川も俺に気付いたのか、軽く手を上げてから首を傾げると、バカにしたように口の端を歪ませてニカツと笑った。

あいつの事は、前から嫌いだった。

自信満々で、戦う相手をいつも見下したような目で見る。

まア、俺ももちろん見下されてる一人だ。

毎回のようにベスト4か、ベスト8には残っても、それ以上は無理だった。

こっちみて

初めて会った頃に、一度言われたことがある、「あの松田弘弥の

こっちみて

弟なんだろ？ 兄貴みたいには、生んでもらえなかつたんだなア。頭も身体も、顔なんか女みてーじゃん。空手も女なみか？」

その時、あまりの怒りに声が出なかつたのを覚えてる。

いつかは、あいつを倒してやろう……そう思いながら、結局、小学、中学の9年間は惨敗だったんだ。

嫌な奴と目が合った、今までみたいに、今年も終わるのか……やっぱり、俺は何も変われない。

鈴ちゃんを好きな事から、抜け出せないみたいに、負ける事からも抜け出せずにもがくんだろうか？

もがくだけ、ましなのかもしれない……

今までは、もがく事も諦めていたのかも知れないから……

覚えてろ、立川！ この出来損ないの俺が、今日は思いつ切り、もがいてやる。

開会式がやっと終わって、俺達選手は観覧席に戻って、それぞれの試合までの間を過ごすため、俺も流れに合わせる様に、階段を上がり始めていた。

その流れが、途中で止まっている箇所があった。

そこに見えるのは、大ッ嫌いな立川顔。

そして、立川が壁についた手の間から見えてるのは、まさかの大好きな鈴ちゃんの笑顔。

はアアア〜。

まさか、鈴ちゃん……好きな奴ってそいつじゃないよね？……勘

弁してよ……。

立川が何か話すたびに、鈴ちゃんが楽しそうに笑う。可愛い唇からこぼれる白い歯も、きらきらの黒い瞳も、そのつものだなんて……

イヤ、まだ決まったわけじゃない。

そうだ、二人とも知り合いなだけだ、小学校、中学校と鈴ちゃんも立川も全国大会に行ってる、合同の合宿にも参加してるんだ。

し・り・あ・い、だよな……

仲良くなっても、おかしくないじゃないか。

あれ？ 仲良くなって……やっぱ、そう言う事なのかなア……笑って話していた鈴ちゃんが、下から来た俺に気付いた。

「じゃアっ、そう言うことで。立川くん、頑張ってるね」

ニッコリと笑顔を立川に残すと、鈴ちゃんは人を掻き分け、無理やり俺のほうへやって来た。

「勇ちゃん、今日の調子はどう？」

鈴ちゃんは、俺に腕を絡めながら、キツイ目で俺を見上げた。

5センチ背の高い鈴ちゃんは、今だけ俺より背が低い。

鈴ちゃんが、階段の一段下にいるからだ。

「調子どうって、何で？」

鈴ちゃんは、階段の反対側にいる立川を指さした。

「あいつがね、個人戦の組み手で自分が優勝したら私に付き合っただけだ。欲しいって」

なんだと！ こんな公衆の面前で、どの口が言うんだ！ クソッ

俺は、立川の自信と勇氣にショックを受けていた。

俺が、10年間できなかつた事を、奴はあっさりやってのけたんだ。

答えは？ 答えはOKなのか？

「れッ鈴ちゃんは、何て……」

鈴ちゃんは、俺の胸を人差し指で突いた。

「OKよ。だって、勇ちゃんがあいつを倒すから」

「何だよそれっそんな事勝手に決めんな！ もし俺が負けたらどうすんだよ」

鈴ちゃんは、下からジツと俺を見上げたままだ。

「あら？ 勇ちゃん負けるんだ。残念だなア。じゃあ、私あいつと付き合うしかないわね」

俺は、頭の血管を血が上ってくるのを感じていた。

なんで俺なんだ！

あつと、そうだつ兄貴がいるじゃないか、兄貴が立川の優勝を阻んでくれる。

あいつがどんなに強かったって、まだ1年じゃネーカ。

高校には、俺らが思う以上に強い奴らがいっぱいいるはずだし、あいつが優勝なんて無理に決まってる。

落ち着け、俺……まだ、付き合ってたわけじゃないし、鈴ちゃんの言い方からして、あいつが鈴ちゃんの好きな人とは思えないし、とにかく、落ち着け、俺。

「鈴ちゃん、兄貴にっ」

鈴ちゃんが、俺の口を押さえた。

「ダメ！ 勇ちゃんがいいの。弘にいじや当たり前でしょ。ツマンナイわ」

ツマンナイって……

そうだ、鈴ちゃんは昔から、此処って時に限って、俺を指名する。そして、俺は鈴ちゃんの期待に応えるために頑張るんだ。

小さい時に、鈴ちゃんの家の近所の子達とあそんでたら、鈴ちゃんの指名で「自転車坂を下る競争」に借り出されたことがある。

傷だらけになったっけ……でも、俺は、その時……勝ったんだ。

でも、今回は空手だ……俺はトラウマに勝って……イヤ自分に勝てるのか？

オヤジが言ってた、自分に勝つってトラウマに勝つ事か？

俺が、黙ったまま考え込んでいると、

「勇ちゃん、頼んだわよ。私を立川君から守ってね」

スツゲー事を言ってから、鈴ちゃんは、俺を置いて、さっさと観覧席に上がっていった。

なんて身勝手な、ワガママな鈴ちゃん、でも好きなんだ……俺つて、痛いよなア。

鈴ちゃん、あんたつて人は何を考えてるんだ。

ほら、立川が今にも俺に噛み付きそうな顔して睨んでるじゃないか。

立川の口が、大きく開いた。

「ま・つ・だア！ 絶対に負けないからな！ 叩きのめしてやるっほら、あいつは頭にきちまつてる。」

鈴ちゃんは、いったい何て言っただんだ？

あの怒りようは、ただ事でないでしょう。

バンツ！ いきなり背中に衝撃が走った。

「勇？ お前、立川に恨みでも買ったのか？ まア相手の平常心を喪失させるのは、作戦としては賢いやり方だが、身体に気をつけるよ」

兄貴が、真剣な顔で……笑ってる？

「え？ 身体に？ 気をつける？」

「立川が言っただろ、叩きのめすつて。まあ、叩きのめすのは、スポーツ空手では反則になるが、怒りあまってとなるとな。救急車の世話になる事も、考えに入れとかないとして事だ。ははっ」

兄貴、ははっじゃないよ、原因は、何を考えてるか分かんない、鈴ちゃんなんだぞ！

こっちみて

「14」 身体に気をつける（後書き）

「私を守って」「どう言う意味ですか？」
鈴はどこまでも、勇の心を揺さぶります。

こっちみて

「16」 形試合（前書き）

弘弥と鈴ちゃんの形試合を見ながら、勇は自分の内面と向き合っています。

こっちみて

「16」 形試合

観覧席に着くと、鈴ちゃんはタオルを持って立っていた。

「勇ちゃん、形の試合に行ってくるね」

俺は、観覧席の一番上で、鈴ちゃんの腕を捕まえた。

「鈴ちゃん、立川に何て言った？俺に、すっげえ怒ってたぞ。殺されたらどうすんだよ」

鈴ちゃんはプツと笑った。

「そんな事が気になるんだ、勇ちゃんって。いいつ私の前を歩くって言ったのは勇ちゃんでしょ。だから、勇ちゃんは本気になったって思ったの。本気の勇ちゃんに、立川君なんて勝てやしないって言ったのよ。付き合いたいなら、勇ちゃんを倒してからにしてとも言ったわ。だから、お願いね」

鈴ちゃんは、そのまま俺の手を振り解いて歩いていった……勿論試合に行つたに決まつてるけど、鈴ちゃんは一体なにが言いたいんだ？

俺は一人ぼっちで取り残された様な気分だった。

「何いってんだ！お前つなに考えてつかワカンネーし！」

大声で怒鳴つた俺に、鈴ちゃんは遠くでタオルを振った。

呆然と立ち尽くす俺の頭を、クシユツと撫でていく手があった。

「勇、今日は最高の形を打つぞ、見ててくれよ」

兄貴だった。

兄貴は、真っ直ぐ前を向いたまま、俺に手を上げて歩いていく。

鈴ちゃんと兄貴は、形の試合に出場する。

ふぬけた形を打つ俺には、師範は形試合に出ることを許してはくれないから、俺はいつも観覧席から二人を見ているだけだった。

俺は、大きく溜め息をつくとき、師範たちから少し離れた席に座り、大会パンフを見て、二人の試合コートを確認する、いつもの作業に入った。

ドスツと音がしたので、誰だろうと横を見ると、師範がいつもの苦い顔で座っている。

「なあ、勇よ。そろそろお前も、本気にならんかア？ 己の魂を見る……何が見える。何が欲しい、何がしたい、どう生きたい。お前は、松田弘弥の弟ではないはずだな、松田勇、それがお前。兄の陰に隠れ、己の優しさの陰に隠れていいのか」

70歳になるうかと言う師範は、それ以上は何も言わず、黙って試合会場を見つめている。

俺の周りの人間は、最近おかしんじゃないか？ 俺に何をしろって言ってるんだ。

俺は、今までと何も変わらないはずじゃないか……何を期待して、訳のわからない事ばかり言ってくる？

本当に、変わってないか？

みんなの言ってることが、本当に分からない事か？

いや……分からないふりをしてるだけだ。

分かったと言って、また失敗する事を恐れているから。

今朝、父さんが言ってた、「自分に勝てなきゃ、他の誰かに勝っても意味はないんじゃないか」って事……あれだって、本当は理解できる。

俺は、小さな頃に泣かせてしまった鈴ちゃんの涙を理由にして、自分の弱さから逃げてるだけなんだ。

鈴ちゃんの事がすきなくせに、鈴ちゃんに相応しい男かどうか、そればっか気になって、いつも兄貴と自分を比べてた。

弟のように振舞って、鈴ちゃんと兄貴の後ろからついて行ってたのだって、鈴ちゃんに男として拒絶されるのを怖がってたからだ……

俺は、今日この試合から変わらなきゃいけない。

鈴ちゃんのためでなく、例え鈴ちゃんが泣いたとしても

そして、鈴ちゃんに嫌われたとしても、俺は俺の為に、今日の試

合を戦うんだ。

そんな簡単なことも、俺は今まで分からない振りをしてきたんだ。

兄貴の形試合の一回戦が始まった。

まだまだ、選手のそれぞれに硬さがあり、本来の実力は中々出てこない。

兄貴も例にもれず、緊張しているようだ。

今まで、俺は兄貴が緊張するなんて考えた事がなかった、って言うか、俺にとっての兄貴の存在は、完璧でないと困る……

だって、自分自身と戦う事を避けてきた俺だ……「完璧なお兄さんを持つと苦労するわね」って皆におもってもらわなきゃって……だ。

でも、俺はもう兄貴に隠れて、自分をごまかすのは止めるんだ。

兄貴の事も、一人の男として、ちゃんと見てなきゃ。

いつものように、兄貴はあつという間に決勝戦まで上がってくるだろう。

ほら、俺がつまらない事をウダウダ考えてるうちに、最後の試合だ。

決勝戦まで取って置いた、難度の高い形を兄貴は打つはずだ。

始まった……

敵が目の前にいることを想定して行われる形は、相手の動きを読む深い静の動きと、敵に打って出る素早い動の動きが折り重なって

出来上がっている。

どこまでも威圧感を醸し出す静の時間、兄貴の動きに気合が溜まっていくのを感じる。

気が頂点まで溜まった瞬間に相手に繰り出される技は、本当の敵が目の前にいたとしたら、完璧に打ち取れたであろうと思わせるほど、素早く、力強かった。

また、静の時間が訪れる……

兄貴の、完璧な演技を見ながら、このひた向きに空手に打ち込んできた男の青春の時を考えた。

兄貴……楽しい事はあったか？

好きになった女の子はいたのか？

いつまでも本気にならない弟に嫌気はささなかつたか？

兄貴……しっかり見せてもらったよ、兄貴の最高の形の演技。

兄貴は、勝った。

何だか、感動して、目が熱くなった。

兄貴にとつての高校最後の形の試合は、俺の記憶にも、一生残るだろうと思った。

俺に、本当の事を伝えてくれる、そんな形だった。

こっちみて

「青くさい」

隣で試合を見ていた師範がぼつりと言った。

「師範、兄貴は優勝したんですよ。それに俺も見てましたけど、凄

い形だったし、そんな言い方はっ」

師範は、ニヤリと笑って俺を見た。

「青くさいもんは青くさい。あのな勇、形にはその人間の人生が出るもんよ。どれほどの時を生きてきたか、どれ程の辛酸を舐めてきたのか、どれほどの喜びを味わってきたのか……逆を言えば、ワシらのような年寄りには、弘弥のような形は打てんと言う事よ。青くさくていいじゃないか、あの朝日に向かって露を飛ばしながら伸びていく若竹のような青くさが、羨ましいのオ。勇、お前もそろそろ本腰を入れる」

「ああ……はい」

そうきたか、じゃあ次回は俺にも形の試合の出場チャンスをくれよ、師範。

「ほら勇、もう一人。お前が見とかんといかん奴がおるだろうが」

師範の指さした方向には、鈴ちゃんがいた。

コートに立って、始めの声を待っている。

始まった……長くて細い腕が、スーと伸びて架空の敵に向かって行く。

「鈴は、何かを決めたようだなア……今までの静と動の織り合いの中に、凜とした意気込みを感じるわ。さては、さてはと言うところか？ なア勇よ？」

なんのこっちや？ 師範、あなたは言う事が分かりにくいでしょ。

でも、師範の言っている事は間違っていない。

鈴ちゃんの形は、美しくて、見ている者をその美しさで圧倒し、技の切れで打ちのめす、そんな形を打っていたと思う。

けど、今日の鈴ちゃんは、匂いたつような美しさといった表現がピッタリな気がする。

でも、誰にも汚される事のない強さと、真っ直ぐな気合を感じる。

何が、鈴ちゃんをそんなに変えたんだろう……

いよいよ、俺も変わらなきゃならない。

結局、鈴ちゃんは準優勝で終わった。

1年で準優勝を勝ち取るなんて、鈴ちゃんはやっぱり凄い。そりゃあ、あの美しさに勝てる子なんてなかないだろう、って美しさだけで勝ったわけじゃないけどね。

さア今度は俺の番だ。

自分自身と戦う為に、さあ……っと。

組み手の試合前にトレーニングルームに行こうと立ち上がった俺を、師範が見上げてニヤ〜と嫌な笑いを浮かべた。

「勇、しっかりトレーニングをしてから試合に行くんだな。この組み合わせなら、2回戦を勝ち上がったら、立川が待ってるだろうさ」「パンフレットを持上げて、師範はぴらぴらと俺の目の前で振って見せた。」

「……………」

何だって！ 3回戦目に立川？

クソッ負けたくネー。マジで心の底から思うのは、俺の本気！

「16」 形試合（後書き）

「勝ちたい」って本気で思うこと、それはとても大切な事で、とても怖い事。

「勝ちたい」と思えば思うほど、負けることが怖くなる。

次話は、立川との対立を通して、勇の心の葛藤を覗いて見たいです。

「17」 トレーニングルーム（前書き）

男前な立川君、可愛い系の勇。

本当に男らしいって、何なのでしょう？

こっちみて

「17」 トレーニングルーム

俺は、トレーニングルームに向かいながら、さっきの鈴ちゃんの試合の後の顔を思い出していた。

中学の時には、ほとんどの形試合で優勝を勝ち取ってきたから、きつと残念がるのだろうと思っていた俺の予測は外れた。

なぜか、満足げで穏やかな表情で笑ってた。

それは、無理して笑ってるんじゃないやなくて、心からの笑顔だって俺には分かる。

俺は、10年も鈴ちゃんだけを見てきたんだ。

鈴ちゃんの中の何かが変わったって分かる、でも、何がどう変わったって聞かれたら困るんだ。

それは、俺が知りたいことだから……。

練習場に着くと、今から始まる組手試合の稽古をする選手で溢れかえっている。

ムツとする熱気が、肌にとわりついて、汗のにおいと混ざって呼吸困難になりそうだ。

俺は、取り合えず鏡の前の、少しだけ空いたスペースを確保した。鏡に映った自分の姿に目をとめた。

小さな頃は女の子によく間違えられただけあって、高校生になつた今でも、男くさい感じはあまりしない。

薄茶色の瞳を覗き込んだら、結構カワイイかも？　なんて思う。

オイオイ、俺はここに何しに来たんだ。

「おい！　お前ここに何しに来た。自分の顔に見惚れんなら、女子便にでも行って来いよな。カワイ子ちゃん」

嫌な奴の声に、振り返るのもおっくうで、鏡越しに睨みつけた。

俺の後ろに、眉を片方上げて、腕組みしている立川の姿があった。「ああ、立川さんと違って、身だしなみにも気を使わないと、女の子に嫌われてしまうんでね。男前の立川くんには、分からない悩み

かなア？」

あんま、イヤミになってない気がするなあ。

俺は、結構もてるほうだと自覚はあるが、立川には敵わないだろう。

奴は、筋肉質の無駄のない体形で、身長は俺より10センチ以上高いだろう……きっと180センチ近くはあるんじゃないだろうか。ずっと切れ長の目は、細い顎によく合っていて、シャープさを強調している。

そうさ、男の俺でも、カッコいいって思ってるよっクソッ

「ところで、松田、お前って、井原鈴の何なわけ？ お前の兄貴の彼女なんかと思ってたら違うつーし……」

立川は、思いつ切りうつとうしそうに、俺をもう一度睨みつけてきた。

なんて、嫌なヤローなんだよ立川お前って！

「そんなのお前に関係ないんじゃないの？」

俺は、そ知らぬ顔を装って答えた。

本当は、ムカツイテ、ムカツイテ仕方ないんだけど、あえて隠し通すプライドは持つてる。

「関係あんだよ。俺は彼女と付き合うことにしたんだ。松田弘弥の彼女なら諦めもするけどさ、お前ジャーな」

「だから、俺達の事はお前には関係ないし、お前の事も俺には関係ないんだよ。練習の邪魔だどけよ」

俺は、こいつの顔を見ているだけで、だんだん腹が立ってきている自分に気付いた。

兄貴が言ってたよな、頭に血をのぼらせるなって、のぼらせるなら相手の血か……

鈴ちゃんが立川に言ったって言葉ホントかな？

ここで、立川君の気持ち逆撫で作戦といこうかな？

「なア立川ア、鈴はなんて言った？」

俺の言葉に、怒りに顔を赤く染めた立川が口を開く。

「俺がこの大会で優勝できたら、付き合えって言ったら、それは無理だっけ言ったんだよ。お前の兄貴がいるからだと思ったら、違った。お前を指さして、勇ちゃんがそんな事させないってっよ!!!」
本気の松田勇には、俺は勝てないんだとさ!!! だから、お前達の関係を聞いてんだろうが!!!」

立川は、さらにヒートアップしている様だが、俺は逆にスーと血の気が引いた。

立川を怒らせるのに、仕掛けた作戦だったのに、俺は自分の掛けたワナにハマッタみたいだ。

鈴ちゃんの気持ちになって仕方なくなってきた。

鈴ちゃんは、本気で俺に掛けてるのか、どうするよッ勇……

カツコよくて、空手も強い、ましてや自分を好きだって、ハッキリと自信を持って言ってくれる男。

そんな立川を、鈴ちゃんはどうして受け入れない?

どうして、こんな俺に自分の恋愛を掛けたりするんだ?

鈴ちゃんにとって、俺は何だ、俺をどう思ってるんだ鈴ちゃんは

……

まさか、ス・キなのは俺……なわけネーカ……

ボーっと考えていた俺は、いきなり胴衣の襟を掴まれて、引っ張られた。

「なに無視してんだよ。人の話きいてんのかよ! ムカつく奴だな

アツ。松田っ絶対に3回戦まで負けんなよ。俺がこの手で、ぶった

おしてやる!!!」

「……ッ!!!」

俺は、立川の手を掴むと、思いつ切り振り払った。

「怒ったかつカワイコちゃん! 怒った顔もかわいいなア! そんなんで俺には勝てない!!!」

立川の、怒りを露にしながらも、あくまでも俺をバカにした態度に、俺の頭にも、だんだん血が上ってきていた。

俺たちのいさかいに、周りもざわつき出していた。

立川を殴りたい衝動が沸き起こってくるのを、拳を握って押さえ込んだ。

こんな所で、もめごとを起こすわけにはいかない。
そのまま、後ろで叫んでる立川を残して、練習場を出た。
観覧席から此処まで履いてきた運動靴を足にひっかけて、建物を
出る。

いつの間にか、走り出していた。

呼吸を整えながら、いつも兄貴と一緒に走るように、ゆっくりしたペースで走った。

ロードワークは、結構気持ちを落ち着けてくれる。

ゆっくりと流れる風景に、心が和んでいく。

落ち着き始めた心の中で、俺は色々考える。

立川は、どうしてあんなに俺に食って掛かる？

そうだ、あいつ鈴が付き合ってるのが兄貴なら諦めるって言ったんだっけ。

で？ 俺なら諦め切れない……、そんな事あるのかよ。

俺は？

鈴ちゃんは……好きな人がいるって言った。

それが兄貴だったとしても、立川だったとしても、俺はきつと鈴ちゃんを諦めるなんて出来ない。

だって、そうじゃないか？

鈴ちゃんが、誰を好きかじゃなくて、俺が鈴ちゃんを好きってことなんだから……

だから、立川お前には負けられない。

俺自身の、10年続いてる恋のためになっ……

こっちみて

「17」 トレーニングルーム（後書き）

自分の気持ちから逃げる事をやめた勇。

鈴ちゃんに気持ちを伝えられるには、まだまだかな？

いつも読んでくださってありがとうございます。

ゆっくりですが、更新していきますので、見捨てないで読んでやってください。

「18」 けっごう惚れたかも？(前書き)

立川の元カノ登場です。
何か、ややこしいかなア

こっちみて

「18」 けっこう惚れたかも？

俺は、30分程のロードワークを終えて、試合会場に戻ってきた。マジな話、こんな試合当日の試合直前に、ロードワークなんかしてる奴は皆無で（当たり前だけどな）会場の周りの街路樹の並ぶ歩道を独り占めした俺は、清々しい気分ですべて帰ってこれた。

吹き出る汗をタオルで拭い、拭いたついでにタオルで顔をあおいだ。

当然の事ながら、胴衣は汗でびっしょりと濡れていた。

この季節には、汗をかいた後は冷やさないとしないと、風邪を引いてしまうから、気をつけなくちゃナ。

そんな事を考えてたら、誰かが俺の後ろに立った。

「ねえ、私の形試合は見てくれた？」

俺は、誰の声か分かっていて、声の主の方には顔を向けずに答え

た。
「見たよ……すっげーな鈴ちゃんは、いつの間にか、大人の女の人みたいな形に変わってた」

「そつ変わってた。それなら、誰か変えてくれた人がいるんでしよう。私は変えたつもりはないもの」

ちよつと上ずった様な声に、鈴ちゃんの方を見た。

そこには、顔を紅く染めてちよつとふくれっ面の鈴ちゃんがいた。誰か、か。

俺がその誰かなら良いのについて思った。

あんなに、色気のある、大人な鈴ちゃんに変えたのが、俺なら……でも、「それって俺だったりして」なんて、「冗談でも言えやしな

い。
い。
俺は、鈴ちゃんの事となると非常に臆病なのはそうそう変われない。

でも、これからは少しずつ変えていかなきゃ、誰かに鈴ちゃんを

取られる前に。

「俺も、来年は形試合に出たいと思ってる。自分自身と向き合っためにも……だから、俺の形も見て欲しい……いつか、きっと、変わった俺を」

俺はそう言っただけで、鈴ちゃんを振り返らずに練習場へ向かった。

鈴ちゃんも、何も言わなかった。

いつもなら、結構かるくちを叩くせに、今日は何も言わなかった……

ちよつと気になるけど、俺は今からの試合に集中する事だけ考えないといけないんだ。

俺が、練習場に入ろうとした瞬間、誰かに腕を掴まれた。

「あんた、誰なの、今話してたの伊原鈴でしょ。どういう関係？まさか彼女とか？ ってあの女の彼氏って松田弘弥か、何とかって言うんだよね。あんたじゃないなア」

俺の腕をギュツと強く握っている女子高生らしい女は、俺の顔を下から見上げて睨んできた。

「あのさ、お前ねエ、人に、あんた誰って聞くなら、自分が先に名乗れよ。常識だろーが」

兄貴や鈴ちゃんの事は知ってるくせに、俺を知らないこの女に、俺はけっこう腹をたてていた。

女は、化粧で黒々と縁取りされた目をバチバチと瞬きさせてから答えた。

「立川くんの、元カノのジユリ。で、あんたは伊原鈴とはどんな関係？」

立川の元カノ？ って、もしかして鈴ちゃんのせいで振られたとか言うののか？

「ふ〜んっそうなんだ、で？ 鈴と俺のことが、あ・ん・た・に何の関係があるのかなア」

立川の元カノさんは、マスカラとか付け睫毛とか、分かんないけ

どバサバサと音を立てそうなほど瞬きしながら、俺をジッと見ている。

「あのさア、あの伊原鈴つてさ、カレシいないの？ だから人のカレシに色目とか使ってんじゃない？ どう見たって、あの女よりアタシの方がイイ女だしイ！ あんたもそう思うわよね」

「まさか、オモワネーッショ！ そりゃア鈴ちゃんの方が数倍可愛い」

オットしまった、元カノさんの顔が怒りで真っ赤になってる。

握られていた俺の腕は、より一層の攻撃を受けている。

「ちよつと、あんたいい度胸ジャン。アタシの何処があの人に負けてんのよ。ハッキリ言いなさいよ」

元カノさんは、ムチャクチャ恐ろしい顔で、俺に迫ってきた。

「ちよつちよ、ちよつと落ち着いて。えつとさ、それは俺の好みの問題つてか、立川はきつとあんたのが可愛いって思うんじゃないの？ 俺は、けつこつ素顔に近い方が好みだから……あつそうだ、あんただつてそんなに化粧に力入れすぎてなきゃ、けつこつ可愛いつてか、スツゴイ可愛いと……思うんです、け、ど」

怒り狂つた、立川の元カノさんは、少し落ち着いたようにキツク握っていた俺の腕をほどいた。

「そう……立川くんにも、前に言われた事ある……メイクがケバイつて……でも、立川くんが目が大きな女の子が好みだつて……アタシ、あんま目おおきくないから……だから、きつと伊原鈴にはなれない。メイクとるなんて怖い……」

俺は、目の前で涙ぐみ始めた立川の元カノさんが、可哀相になってきた。

そりゃあ、俺だつて鈴ちゃんのを吸い込まれそうな大きな澄んだ瞳に取り込まれた口だけだ。

でも、それだけじゃない、それだけじゃ今までずっと好きでいられない。

人間、たった一つだけが好きで、全部を受け入れるなんて無理だ。

その反対で、一つ気にいらなからって、全てを否定したり出来ないだろ？ 本当に好きな相手ならさ。

俺は、鈴ちゃん全部が好きだ。

怒った鈴ちゃんも、生意気な鈴ちゃんも、黙ったまま何考えてるか分かんない時の鈴ちゃんも、ちよつと意地悪な事をニッコリ笑って仕掛けてくる鈴ちゃんも、全部ひつくるめて好きだ。

もちろん、泣いた時の鈴ちゃんは嫌だ。

どうしていいか分からなくなるからなんだけど……でも、それも嫌いにはならない。

この元カノさんだつて、きつと……

「ねエ、あんたさア立川の何処が好きなの？」

元カノさんは、「えっ」って顔して俺を見た。

「立川くん？ 何いつてんの？ カッコいいし、みんなの憧れだし、彼女っただけで自分に価値がでるみたいなどこあるじゃない。ブランドみたいなの。それだけじゃないけど……それって大きいじゃない」

「……………」

俺は、この女の言葉に嫌な気分になった。
「あんた、立川に振られて当然だわ。あいつは嫌な野郎で、男前つてこと鼻に掛けて、自分が言い寄ればどんな女でも落ちるって思い上がってる、バカ野郎だ。でも、人間なんだよ。ブランドじゃない。あいつをブランド扱いしてるあんたは、鈴ちゃんの足元にも及ばない」

立川の元カノは、俺のスネを思いつ切り蹴った。

「イッタッ！！」

「バツカじゃないのっ。そんなこ、と……分かってるから、よけい悔しいんじゃない！ 立川くんが、最初から本気でアタシを好きじゃないって、知ってるから……だから、アタシだけ真剣なんて……グスっ」

なんなんですか、この女は？ 人の足蹴っについて、泣き始めたじやねーか。

「ちよーつとオ、泣かなくてもいいんじゃないの？ 余計な事言つて悪かったって、なっ？」

これじゃあ、俺が悪者みたいじゃネーカ。
悪いのは、彼女がいるくせに他の女に心変わりした立川じゃないのか？

「あのさ、あんたが本当に可愛いつて思ってくれる男はイッパイいるだろ？ 本当のあんたの良さを分かってくれる男つて必ずいると思う。だから、泣くな。なっ？ 自分をごまかさなでいたら、きつと出会える、そうだろ？」

立川の元カノは、泣くのをやめて俺をジーっと思つめた。

「あんたつてイイ男。けっこう、惚れたかも？ アタシつて可愛い系の男の子も好きなんだよねエ……ンフツ」

ンフツじゃねーだろ、こりない女だなア……。

その様子を、いつから見ていたのか、立川がこっちに歩いてくるのが目に入った。

「クツクツク。お前ら何やってんの？ もてない者同士で、付き合いでも始めるのか？ それはいい考えかもな。でもジュリ、お前つて男なら誰でもいいんだア、振つて正解だな。元々、つなぎ程度にしか思つてなかつたから、いいけど。まア松田も、伊原鈴のことは任せろ、心配はいらない。俺の彼女になるんだからな」

俺は、立川を黙つて見つめた。

さつきトレーニングルームで感じた怒りは無い。

その代わりに、冷めていく自分がある。

「立川、鈴はお前とは付き合わない。お前には鈴と付き合う資格はない。このジュリちゃんともな。お前は最低な男だよ。だから、俺はお前には、絶対に負けたりしない、俺自身の為！」

俺は、トレーニングルームに背を向けて歩き出した。

立川は、さつきのトレーニングルームでの揉め事の時と同じ様にわめいている。

「立川くん、あんたこの松田くんに勝てないよ。だって、男として

もう負けてるじゃん」

俺の背中の方で、そう叫んだジュリちゃんの声が聞こえた。彼女の走ってくる足音もする。

「ねエ、どこ行くの？ ジュリも行っていい？ アタシ、あんたのこと好きになっちゃった」

「……………」

「ねエってば、ジュリもついて行っていい？」

俺は歩いていた足を止めた。

「俺さ、鈴ちゃんが好きなんだ。幼稚園の時から、ずーっと片思い。でも、これから自分自身で、この恋を変えて行きたいって思ってる。だから、誰にも邪魔されたくない。もちろん、あんたにもな、ジュリちゃんっ」

「あ……………」

俺は歩き出したけど、彼女はもっついて来なかった。

「松田くん！ がんばって」

俺は、兄貴がよくするように、振り向かずに手を上げた。

ちよっと、カッコよかったかな？ 兄貴みたいに……………」

こっちみて

「18」 けっこう惚れたかも？（後書き）

ジュリちゃんって、けっこういい女なのかもしれません。
自分を見失わず、自分自身でいる事って、難しいですよ。
いくつになっても、迷ってはかりの作者です。
恋に悩むことは無いんですけどね……残念ながら。

こっちみて

「19」 試合開始（前書き）

一回戦から緊張の勇。

「俺のトコまで上がって来い」そう言った兄の弘弥の言葉どおりに勝てるのかな？

こっちみて

「19」 試合開始

「がんばってつか……」

さっきのジュリちゃんの応援を思い出していた。

俺は、トレーニングルームには入らず、観覧席から出てすぐにある空きスペースを利用して、自主練習をしていた。

大分、身体が温まっていい動きが出来始めていた。

さっき走ったのも、良かったのかもしれない。

確かに、走ると体力は消耗するけど、気持ちは落ち着いたし、身体がいつも通りの流れに喜んでいっているような気がする。

タオルで、汗を拭いて少し休んだ。

ポンツ！

誰かが、俺の頭を何かで軽く叩いた。

「勇、そろそろ試合だ。集合掛かってるぞ。俺も行くから、一緒に降りろ」

兄貴だ、グローブで叩いたらしく、俺の頭の上で、赤いグローブがゆらゆら揺れている。

「集合かア。じゃっご一緒にしますか、お兄ちゃま」

「うっ気持ち悪う、勇、お前大丈夫か？」

ちよつと、上目遣いに見つめたら、兄貴に思いつきり寒がられた。

「大丈夫だよ。冗談だろ、緊張してネー証拠つてとこか」

「それなら、いい……本気なら気持ち悪すぎるからな」

「あたりまえだろ！」

俺達は、笑いながら階段を降りて試合コートの並んだ会場の入り口まで来た。

こっちみて

「勇、今からは敵同士だ。いいか、本気でかかってこい。立川を倒した先には、俺が待ってる。俺のところまで上がって来い。いいな」

兄貴が俺の腕に拳を当てたまま呟いた。

「……はア、兄貴と試合しようと思えば、決勝まで行かないと当た

らないでシヨ。それまでに俺はどれぐらいのツワモノと戦わないといけないんですかね？ いいさ、気長に待ってやがれ！」
兄貴はフツと笑うと先に会場に入って自分のコートの点呼を受けていた。

「熱いねエ、あいかわらず兄貴は……でも、今日は俺だって熱い」
兄貴と同じ様に呟くと、俺も会場に入った。

これから先は、誰にも頼れない戦場、そして俺は今日、自分と戦う為にこの戦場に入る。

毎回、どの試合でも一回戦は異様に緊張する。

今までに一回だけ、少しも緊張せずに一回戦から準決勝まで戦った事がある。

母さんと兄貴は、今でもあのときの事を笑い話にする。

小1の秋に、泊りで試合に行った時、皆と一緒に嬉しくて舞い上がって眠れなくて、試合当日はボーっとしてた。

俺は、試合のコートで自分の出番までの待ち時間の間、ユラユラと船を漕ぐ様に眠っていたらしい。

名前を呼ばれて、目を覚まし、試合をして勝っては眠って待っている。

その繰り返しで、準決勝まで残った。

忘れもしない、その時の準決勝の相手も立川だったんだけど、勿論マ・ケ・タ……。

あの時、俺は立川をカッコいいと思った。

いつかコイツに勝ちたいと思った……

そう、今日のはあの時からの思いを叶えてみせる。

ただ、今日のはあの時みたいに、寝てる訳じゃないから、緊張が俺にとつての最大の敵だ。

『赤！ 松田選手！』

『青！ 木村選手！』

さあ、一回戦の始まりだ！

今日は、身体の切れがいい。

相手は、同じ高1だし、身体の大きさも俺と変わらない。

上段突き1ポイントを入れられて、ちよつと焦ったけど、中段蹴り2ポイントで取り返した。

なかなか、素早い動きの相手だけど、残り20秒を切ってるし、ここは大技？ いや、慎重に中段突きで狙う？ んん、身体よ勝手に決めてくれ！

カッーン！

『上段蹴り！ 一本！』

よっしゃっ、これで合計5ポイントあと1ポイントで勝ちだ。

落ち着け、俺、余裕じゃないか。

カッーン！

『上段蹴り！ 一本！』

こっちみて

マジ？ 上段蹴りくらった。

5対4……、マジ？ 気を緩めるな、俺！
頑張るんだろ。

大丈夫、落ち着け、落ち着け。

『ピピッ！』

『5対4。赤の勝ち！』

はア、何やってんだよ、時間切れで助かったけど、あのままなら6ポイント先取りされてたかもしれない。

今日の試合は、試合時間1分半流し、6ポイント先取だから、負けているときは建て直しが効くけど、逆に勝ってる時でも、巻き返されることもある。

4ポイントだったら試合が早すぎて、立て直すのは難しい。

どっちが良いのかは、俺には疑問だ？

とにかく、こんなトコでボツチリコツチリやってたら、負けちまう。

何とか勝ったから良いけど、これじゃ兄貴のとことろじゃない、勿論、立川のトコまでも残れないぞ。

気合を入れる、勇！！ お前は、変わったんだ。

二回戦を結構余裕で勝った。

今度は、多様な攻撃を仕掛け、自分の身体が波に乗っているか、技がかみ合っているかを確かめるように戦った。

これに勝てば、いよいよ立川との戦いが待っていると思った。

目の前の相手は、立川ほど強くはなかったけど、タイプ的には立

川によく似ていて、素早い中段突きを得意としながら、長身を生かした上段蹴りも入れてくる上手い空手をする奴だった。

俺？ 俺は、上手い空手とは言えないだろうな。

どちらかと言えば、本能に任せるタイプだから、余計に身体と技がかみ合っているか、波に乗ってるかが気になるトコなんだよな。

さあ、立川が試合用の赤い帯を巻いた。

俺は、立ち上がって、青い帯を巻く。

立川から送られてくる視線を気にも留めていないように、静かに笑ってやることにした。

立川は、きつとはらわたを煮え繰り返しているだろう、あいつは昔から気が短い。

もっと怒れ、立川。

それが、お前に仕掛けた落とし穴だ。

冷静さを無くしたお前の中段突きなんか、俺には入らない。

『赤！ 立川選手！』

『青！ 松田選手！』

『はじめ！』

こっちみて

いきなりだった、立川がワンステップで入ってきて中段蹴りを入れてきた。

『やめ!』

『赤っ中段蹴り技あり!』

まじかよ、こんな戦い方する立川を見たことがない。

空手の名門高に行くって……こういう事なのか?

今までを捨てて、新しい自分のスタイルを作る……簡単じゃないはずなのに……

『はじめ』

立川がぐつと近付いてきて、俺達は突き合った手が絡み合った。

「松田ア伊原鈴は、俺が貰った」

「……ッ!」

言った瞬間に、立川が俺を突き放して、その隙に上段突きを入れられた。

『やめ!』

『赤、上段突き有効っ』

俺は、審判の声に天井を見上げた。

これで、立川は3ポイントを取った。

このまま負けるのか? 今までと何も変わらずに……鈴ちゃんまで失うのか?

「……ゆ……ちゃ……!」

「勇ちゃん!」

観覧席から、鈴ちゃんの声が聞こえた。

「勇ちゃん! こっち! こっちみて!」

えっ? こっちみて?

俺は、鈴ちゃんの声のする方へ顔を向けた。

鈴ちゃんが、俺が振り返ったのを確認すると、大きくガッツポーズをした後に、クルリと回って裏回しの蹴りをする真似をした。

「勇ちゃん！ 負けたら蹴り倒す！」

そう言つて、鈴ちゃんはニッコリ笑つた。

俺は、その応援に苦笑いしながら、こんなに気の強い鈴ちゃんが大好きな自分を再確認した。

『君、ラインに戻つて』

審判から注意を受けてしまったけど、そんなことはいい、鈴ちゃんが俺を応援してる。

それだけでいい。

俺は、無礼を詫びるように審判と試合相手である立川に一礼をしてラインに立った。

『はじめ！』

こっちみて

「19」 試合開始（後書き）

立川との試合の行方は、次話に持ち越しました。

いつも読んで下さっている方、申し訳ありませんでした。

執筆時間がなく、更新できませんでした。

出来る限り、毎日更新したいと思いますが、持病があるため、無理がきかず、ご迷惑をお掛けします。

これに懲りず、これからも宜しく願います。

「20」 お前に負けたんじゃない（前書き）

勇は、一人冷却パックを首にあて、階段に隠れています。
何してるんですか？

こっちみて

「20」 お前に負けたんじゃない

俺は、トレーニングルームの奥にある階段に、首に冷却パックを当てて、一人で座っている。

会場の関係者が使用する階段らしいから、ここなら誰も来ないだろう。

今は誰にも会いたくない気分なんだ。

立川との試合に負けたから？ いや、勝ったさ。

勝ったのに何で一人でいたいかって？

それは俺が聞きたい。

あのジユリって言う、立川の元カノに追われてるんだ。

あっちこっちで、俺の行方を聞いて回って捜してる。

「惚れたとか、絶対にカレシにする」

とかって言うてるらしい。

その気の無いおれには、ハッキリ言って迷惑です。

立川のトコに戻れとは言わないけど、別のをどうぞって感じかな。

そうそう、立川との試合は、鈴ちゃんの勇ましい応援の後、俺の

上段蹴りが立川の側頭部に入り、そのすぐ後に裏返し蹴りが立川の

顔面に入って俺の勝利で終了した。

あつと言う間の逆転劇に、立川も、俺自身もぼうぜんと立ち尽くしていた。

小1の秋からの願いが叶った瞬間だった。

小1からの9年間の俺と、今日の俺、何が変わったのかはハッキリしている。

試合の後、立川が俺の横にきて話し掛けて来た。

「松田……、お前はいつの間にかそんなに強くなった。俺だって、いやっ俺のほうじゃ絶対お前よりキツイ稽古に耐えてきたはずなんだ。なぜ……なぜ負けた、お前に……」

俺は、自分の心の中でハッキリと見えたことを立川に教えてやる

事にした。

だって、立川の顔があまりにも可哀相だったから、見ちまったから、いままで傲慢だった奴の初めての涙。

「立川、俺には守らないといけないものがあるんだよ。お前には無い」

「守らないといけないもの？ 伊原鈴か」

俺は首を振った。

「いいや鈴ちゃんじゃない。鈴ちゃんを10年間思い続けた俺の想い」

立川が、俺をまじまじと見つめた。

「お前って……」

「バカだと思っただろ！ 鈴ちゃんとの事だけじゃないっ、てか俺は今までの自分じゃなくて、これからの自分を見つめて行きたい。

自分自身に勝つために、思い上がった事をしてきたお前には、負けるわけにはいかなかった」

立川がはめたままの真っ赤なグローブを、俺の胸に当てた。

「そうか、俺はお前に負けたんじゃないんだ。俺は、思い上がった俺自身に負けたってことか……なんか、その方が、お前に負けたってよりキツイ気がするなア……まっいつか、じゃーな、次は負けねー」

そう言って、立川はコート脇から立ち去った。

立川は、もつと強くなるかもしれない、そう思った。

えっ俺？ その次の試合？

ああ、この首にあててる冷却パックが物語ってるでしょう。

3年の大男が相手で、大きいくせに動きは抜群で、叩きのめされたって感じで、ハイ負けましたよ。

初めから、兄貴のトコまでは無理だって思ってたけど、これでも結構落ち込んでるかも……

首、痛てーし……

そう言えば、鈴ちゃんの組み手の試合どうなったかなア？

そろそろ終わってる頃だと思っただけ。

パタパタパタ

ん？ まさかジュリちゃん？ じゃないよな……… だったら逃げた
い。

「勇ちゃん！ こんなトコにいた。みんなが心配してるよ。あつ首
痛むんだ。あいつ馬鹿力だったもんね。でも、安心して、さっき決
勝戦で弘にいが見事に討ち取ったから」

俺は、満面笑みの鈴ちゃんを見上げて苦笑いした。

「やっぱ、兄貴には敵わない。あんな奴に勝てるなんて、兄貴の方
が化け物かもしれねーな」

見上げたのがよくなかったのか、首の痛みが増した。

顔を下げて床を見つめる格好になった方が、楽かもしれない。

「勇ちゃん……… どうしたの？ 負けたのシヨック？ あつ立川くん
には勝ったんだから、私何もしないわよ、ねっ？ 勇ちゃんって」

鈴ちゃんは、俺の肩に手を掛けて揺さぶった。

「痛いんだ……… 首」

俺は、鈴ちゃんがあまりに揺さぶるから、つい弱音を吐いた。

男なら我慢しろって？ だって、痛いんだから仕方ないだろ。

「あつゴメン………」

鈴ちゃんは、そう言って俺の横に座って、俺の顔を覗き込んだ。

「ゴメンね。ホントに痛かったんだ。誰かさんから逃げてる口実か
と思っただのに………」

「えっ？」

鈴ちゃんは、ジュリちゃんが俺を捜してるって知ってるんだ、そ
の理由も？

鈴ちゃんは、怒りを含んだような目で俺を睨んだ。

睨んだ瞳もたまらなく可愛いって、俺はイタイ男だ……… 勿論、首
もね。

「ジュリとかって子、勇ちゃん捜してたよ。さっきトレーニングル
ームの前で話してたでしょう。まさか、彼女？ にするの？」

鈴ちゃんの瞳が、一瞬揺れた様に見えるのは、錯覚？

ジュリちゃんと話してるトコ見てたんだ。

でも、何で鈴ちゃんが怒る？

なんだか、おれが悪い事してるみたいない気分になってきた、何でだ？

俺は、自分の顔を覗き込む鈴ちゃんの視線に耐え切れずに目を閉じた。

「勇ちゃん……こっちみて……」

「勇ちゃん、私をみて」

「勇ちゃん！ こっちみてってば！」

何度も呼ばれて、俺は目を開けた。

そこには、ドアップの鈴ちゃんの目があった。

真っ黒な瞳に、俺の顔がハッキリと映ってる。

近ア！

そう思った瞬間、俺のくちびるに柔らかい何かが当たって遠のいていった。

それは、すっごく柔らかくて、熱くて、いい匂いで、頭がクラクラした。

鈴ちゃんが、俺にキスをした？ マジで？

俺は、そつと鈴ちゃんの方を向いた、勿論、首が痛まない程度だけだ。

鈴ちゃんは、俺から顔を逸らすように、反対側を向いている。

自分からキスして、何なんだ？

もしかして、俺がいきなり目を開けたときに動いちゃって、当たったとか？

それじゃあ事故ジャン……

こっちみて

こっちみて

俺のファーストキスは、事故なのか……？

「20」 お前に負けたんじゃない（後書き）

鈴ちゃんからのファーストキス？ 事故？ 勇のためにも、事故で
ありませんように……

こっちみて

「21」 こっちみて（前書き）

勇の気持ち、鈴の想い、色々な事が……

こっちみて

「21」 こっちみて

「鈴……ちゃん……」

俺は、そっぽを向いたままの鈴ちゃんに声を掛けた。

何で無視なんだ、やっぱり俺が無意識に動いて、鈴ちゃんにキスしちゃったのか？

それなら、鈴ちゃんが怒ってるのは俺のせいだよな……

ここは、謝っとく？

「鈴ちゃん、あの、ゴメン。えっと、俺、あのわざとじゃなくて、無意識ってか……いや、事故みたいなもんで、キスするつもりじゃなッ！」

鈴ちゃんがいきなり振り返って、俺を睨んでる。

謝ってるじゃネーカ……何で？

「勇ちゃん！ どうして？ どうして、いつもそうなのッ」

「……はア？……」

「はア、じゃない。いつつも本当の事から逃げてる。この間から、勇ちゃんは変わり初めたって思ってたのに、違ってたの？」

鈴ちゃんは、何故か真っ赤な顔をして、泣きながら怒ってる。

「俺としては、変わったって思ってるッ！」

またキツって睨んだ、睨んでも可愛いけど、怖いです。

「だったら、何で？ 今のは私からキスしたのよ。なのに、どうして事故だなんて言うの。私は、勇ちゃんに自分の気持ちを伝えたくて……キスしたのに！ そんなだから、今までずっと、弘にいの横歩いてきたんだよ、私」

何のことですか？

兄貴の横を歩いてきた鈴ちゃんと、自分をごまかしてきた俺とどんな関係が？

鈴ちゃんの言う事は、やっぱり分かんねー……

「兄貴の横を歩いてきたって………どういう事？」

鈴ちゃんは、大きな目からポロポロと涙を流して怒っていた。
鈴ちゃん、あんたは知ってるんですか？ 俺がその涙が一番に
てな事。

「勇ちゃん。勇ちゃんは、いつも弘にいばかり見てたでしょう。
弘にいの後ばっかり追いかけて……。私は、勇ちゃんの視界に入る
ために、弘にいの横にいる事にしたの。弘にいの横にいれば、勇ち
ゃんに見てもらえるって思った。でも、勇ちゃんはやっぱり弘にい
を見てた」

「鈴ちゃん、それって……」

鈴ちゃんの顔が、より一層真っ赤になった。

「そうよ。私は勇ちゃんが好きななの。ズーっと前から。最初は、大
好きだったクマのぬいぐるみみたいな可愛い勇ちゃんが、私の傍で
動いてるのが嬉しかった……。でも、いつの間にか好きになってたの
クマ？ ぬいぐるみ？」

「やつと最近になって、勇ちゃんが私の事……。見てくれる様になっ
たって思った。私の後ろは歩かないって言った勇ちゃんを見て、私
も頑張ろうって、勇ちゃんに振り向いてもらえる女の子になろうっ
て思ってたのに……。勇ちゃんは、変わらないの？ どうして……。や
っぱり私の事は、幼なじみでしかないのかな……。あの女の子の事が、
好き……。なの？」

いっきにまくし立てた鈴ちゃんを、俺は呆然と見つめていた。

鈴ちゃんが好きな人って俺だった……

鈴ちゃんも、俺をズーっと好きだった。

まア、始まりはぬいぐるみのクマだけ……

俺に自分を見て欲しくて、兄貴の横にいたってか！

俺は、兄貴と仲良く話す鈴ちゃんを見たくなくて、目を逸らして
たんだ！

何やってんだよ……。俺……

もっと早く、鈴ちゃんをしつかりと見れば良かった。

鈴ちゃんは、話し終わってから、またそっぽを向いて肩を揺らし

て泣いてるみたいだ。

分かったから、もう泣かないで、鈴ちゃん頼むよ……
それに、ジユリちゃんは誤解ですから。

「鈴ちゃん……こっちみて」

「鈴ちゃん……こっちみて」

「あの女の子は、立川の元カノ、俺には関係ない、ってか迷惑なの
！」

俺の言葉に、鈴ちゃんが振り向いた。

「鈴ちゃん、俺も鈴ちゃんに、俺を見て欲しかった。ずーっとずー
っと」

「……勇ちゃん……」

「初めて会ったときから、ずーっと大好きなんだっ、痛っ！！」

またもや、首が痛み始めた。

鈴ちゃんの方にずーっと顔を向けていたせいで、傷めた首を酷使
していたらしい。

「勇ちゃん、大丈夫？」

「………大丈夫じゃない」

「うそ……じゃあ、試合ドクター呼んでくるね！」

俺は、慌てて鈴ちゃんの手を掴んだ。

「ドクターはいい。痛みを忘れるような物くれたら、治る……」

ああっ俺ってなんて奴！

さっきのキスの続きが出来るかも？ なんて小細工してるよ。

鈴ちゃんが、俺の手をギュって握った。

「あるよ！ 頑張った勇ちゃんにご褒美！」

鈴ちゃんは、自分が座ってた辺りから、何かを出してきた。

鈴ちゃん……俺が欲しいのは、物、じゃない、鈴ちゃんの……

「はい、優勝トロフィー」

「……！……何で」

鈴ちゃんが持つてるのは、俺が小1の春に鈴ちゃんを倒して勝ち取った優勝トロフィー……

お守りにつて、持ってきてたんだっけ、何で鈴ちゃんが持つてるんだ？

「勇ちゃんのカバンに入ってたの、持って来ちゃった。はい、おめでとう！ 今日の勇ちゃんは誰よりも強かったよ」

そう言つて、鈴ちゃんは俺の膝にトロフィーを乗せた。

何だか、目頭が熱くなってきた。

「前に、弘にいが言つてたの。このトロフィーを大切に出来たら、勇ちゃんは強くなれるつて。勇ちゃんが越えないといけないのは、勇ちゃん自身だつて。だから……」ご褒美

10年前の勝利の喜びが、今やっと自分のものになった気がした。俺は今日、自分自身に勝てたかな？ きつと勝つてるよな。

だつて、鈴ちゃんが誰よりも強かつたつて言つたんだから……

「鈴ちゃん……ありがとう……」

俺は、鈴ちゃんの手をギュつて握り返した。

「ご褒美は貰つとく、でも、痛み止めは別……」

俺は、鈴ちゃんをグツと自分の方に引き寄せた。

トロフィーと一緒に、鈴ちゃんを抱えるようにして、俺は鈴ちゃんにキスをした。

柔らかくて、甘くて、いい匂いで、すつごく熱い鈴ちゃんとのキスに、首が痛い事なんか忘れてた……

そつと、唇をはなした、どうしていいか分からなくて、放したくないけど、取り合えず少しだけ……

「こっちみて……鈴……」俺が言った……

こっちみて

「こっちみて……だいすき……勇ちゃん 鈴ちゃんが言った……」

「イッタッ！」

「大丈夫？」

「21」 こっちみて（後書き）

いつもお付き合ひ下さいましてありがとうございます。
やっと最終話にこぎつけました。

実は、この話は小3の息子の初恋がベースになっています。

只今、可愛い恋愛真っ只中で、将来は結婚したいと言っています。

この恋が、いつか本当に実を結ぶ事があればと願いを込めて書いて
いました。

息子は空手をしていますが、彼女に勝って泣かれた事がトラウマに
なって、未だに彼女には勝てなくなっています。

男の子は可愛いですね……

という事で、本当にありがとうございます。

評価をいただけましたら幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047c/>

こっちみて

2009年3月24日12時03分発行